

祖堂集卷第十二

石頭下卷第九曹溪第七代法孫

荷玉和尚、曹山に嗣ぎ、撫州に在り。師、諱は匡慧、俗姓は高、福州福唐縣の人なり。羅漢院に出家し、具戒して曹源に造る。

因に一日参ずる次いで、曹山乃ち問う、大人還た在りや。対えて云く、在り。曹山云く、略して相見えんと要す、還た得るや。対えて云く、請う、和尚進め。曹山乃ち倒臥す。師便ち珍重して出づ。時に于いて却り来る。曹山云く、曹山適来闍梨に問ひ、与摩に曹山に祇對せる、是れ什摩の時節ぞ。但だ觸道せよ、觸道せよ。師云く、却つて是れ相見の時節なり。曹山深く之を器とす。

ある日の参禅のおり、曹山が問う、お父上はお達者か。こたえて云う、はい。曹山が云う、ちょっとお目にかかりたいと思う。こたえて云う、和尚さん、どうぞ。そこで曹山はごろりと仰向けに寝ころぶ。と、師は「お大事に」と云つて出て行く。暫くして戻つて来る。曹山が云う、さつき曹山はお前さんに問ひ、お前さんはどのように曹山に答えた。これは何の時節だ。觸道せよ、觸道せよ。師が云う、まさにそれがお目にかかった時節です。曹山は深くこれを器とした。

・倒臥 伝灯録趙州の伝に「参南泉、偃息而問曰、近離什麼處。師曰、近離瑞像。曰、還見立瑞像麼。師曰、不見立瑞像、只見臥如来。曰、汝是有主沙彌、無主沙彌。師曰、有主沙彌。曰、主在什麼處。師曰、仲冬嚴寒、伏惟和尚尊體萬福。南泉器之而許入室」とあるのを踏まえたものであろうか。

・曹山適来問闍梨 与摩祇對曹山、というのは曹山という字がくり返されてくどいが、そこに意味があるのかもしれない。

・觸道 意味不明。

池れ自り性に任せて逍遙す。化縁將に至らんとし、初め龍泉に住し、後ち荷玉に居す。辛亥の年に於いて勅詔再三するも辞して免る。玄悟禪師と號す。

師、時有つて上堂して云く、諸の兄弟、只だ是れ走上して言を為し句を為すこと莫れ。曙曙蕩蕩地に、大いに相應を得ること難し。如今心力を省かんと欲すや。直下に休歇し去るに如かず。従前如許多そこばくの不浄の心垢、附託の依解を剥却し、頭を廻らして、汝が自家本分の事、合に作摩生か力を著くべきかを看よ。

師はあるときの上堂に云う、兄弟ひんでいたちよ、走上して言句を為してはならないぞ。そうしているとぼんやりとりとめもなく、相應することは大きに難しいぞ。いま心労を止めたいと思つか。それならずばり言句を為すことをやめることだ。これまでの不浄な心の垢、あなたまかせの知識など引き剥がして、頭を切り換えて、自己本分の事は一体どこに力を入れるべきか反省してみる。

・走上 意味不明。

師、時有つて上堂し、良久して云く、須らく我は好心なりと道つべし。学人便ち問う、如何なるか是れ和尚好心なる。師云く、好心好報無し。

師はある時上堂し、ややあつて云う、自分自身を善人だとしてすえることが大事なことだ。そこで学人が問う、和尚が善意ありとはどういうことですか。師が云う、善意に好い報いはない。

・好心無好報 後出の好心の頌参照。

師、禾山より来たる僧を見て、拂子を拈起して云く、禾山還た這个を説得せしや。対えて云く、但だ這个のみに非ず。師云く、禾山に辜負して什摩なをか作す。

師は禾山から来た僧を見て、拂子を立てて云った、禾山和尚はこれを説かれたか。こたえて云う、それだけではありません。師が云う、禾山和尚の恩を台無しにして何をしようというのだ。

・師の問意は、禾山和尚ならこれを何と云われるか、というのである。これは、禾山に恩を受けている相手の僧に、お前はこれをどう見るか、という問いに他ならない。つまり僧の境愧をためしているのである。それに対する僧の答えは、和尚さんが何でこれようと禾山にはちゃんとある、ということであろうが、これでは師の問意をとらえているとは云えない。それが辜負禾山作什摩という極めつけを喰った所以であろう。

問う、如何なるか是れ密傳底の心。師、良久す。僧云く、若し与摩ならば則ち徒らに耳を側つることを劣するのみなり。師、侍者を喚ぶ。侍者来たる。師云く、焼火せよ。

問う、どんなのが密伝底の心でしょうか。師はしばらく黙っている。僧が云う、そういうことなら耳そばだても仕方ありませんね。師は侍者を呼ぶ。侍者が来る。師が云う、火を起こせ。

・焼火 恐らく、爐に火を起こせと命じたのであろう。伝灯録九匠山の伝に次のように云う、「一日侍立、百丈問誰。師曰、靈祐。百丈云、汝撥鑪中有火否。師撥云、無火。百丈躬起深撥得少火、拳似示之、云、此不是火。師發悟禮謝、陳其所解」。火を火たらしめるもの、それが密伝底の心である。

問う、古人道く、若し一句を記者せば論劫野狐精と作らんと。未審し、古人の意如何ん。師云く、龍泉僧堂、未だ曾つて巡ざさず。僧曰く、和尚如何ん。師云く、風、耳藉を吹く。

問う、古人が云っております、もし一句を深く心に刻みつけたら未来永劫野狐精になるであろう、と。古人の云わんとするところはどこにあるのですか。師は云う、龍泉僧堂はかつて錠をさしたことがない。僧が云う、和尚さんはどうですか。師が云う、風が耳たぶを吹く。

・古人不明。その云うところは、「一句合頭語、萬劫繫驢瀘」と同趣旨であろう。

・龍泉僧堂 師は初め龍泉に住した。そのころの問答であろう。未曾巡というのは、いつも開け放していて、入るものをこばむことはない。古人の意などといわず、何故このわしの意を問わんのだ、ということである。そこで次の質問が出る。

・風吹耳籍 わしにとってはどんな言句も風の音みたいなものだ、過ぎれば消えてしまう。

師又の時に杖を拳起して云く、従上来皆な此の一路の方便の人を接するを留む。僧云く、和尚は猶お是れ従頭に起つるなり。師云く、更めて相い悉することを謝す。

師はある時杖を立てて云つた、むかしの祖師は皆な人を教化するためのこの方便を残しておられる。僧が云う、それでも和尚さんは自分から杖を立てられたのです。師が云う、わかつてくれてありがとうございます。

・猶是從頭起也 杖を立てるということは確かに従上来の方便である。それでもなお今のそれは師がはじめから、つまり自分を起点として示した方便である、というのであろう。

問う、古人道わく、釈迦、室を摩竭に掩い、浄名、口を毘耶に杜ず、と。時人皆云く、眞宗を味まさず、と。未審し、古人の意如何ん。師云く、眉毛を惜取せば好し。

問う、古人が云っております、釈迦、室を摩竭に掩い、浄名、口を毘耶に杜ず、と。それに対し時人は、眞宗を明晰判明に云いあてていると評しております。ところで古人の眞意はどうだったのでしょうか。師が云う、眉毛を大事にしてほしいものだ。

・古人僧肇。質問の僧には時人の評が納得できず、師の評が聞きたかつたのである。古来不浄説法をする eyebrows が抜け落ちるとされるが、典拠は明らかではない。今の場合、眉が落ちるのは古人か時人か、はたまた質問の僧か。

師、時有つて衆に示して云く、若し這裏に向かつて通得するも、未だ是れ自己の眼目ならず。

師がある時の示衆に云われた、たといそこがわかって、まだ自己の眼目ではない。

又云く、古人、蛇の與に足を畫き、眼中翳を生ずることを恐る、復た若^は為^{いか}ん。

又た云われた、古人は蛇足をつけたために眼病みになることを恐れた。さてどうだ。

問う、如何に指示せば則ち時中を味まざることを得んや。師云く、雪上更に霜を加う可からず。僧曰く、与摩ならば則ち全く和尚に因り去らん。師云く、什摩に因るや。

問う、どのようにお示しいただいたら、十二時中の自己を明々白々たらしめることができましようか。師が云う、雪の上に更に霜を加えるようなことをしてはならぬ。僧が云う、では和尚さんに全面的によりかかりましよう。師が云う、何によりかかろうと云うのだ。

・時中 後段に「問、十二時中如何与道相應。師云、莫造作云々」という問答が見える。その中の十二時中のこと。なお不可雪上更加霜というのは、正しく「莫造作」に当たるであらう。

・因 主体性のない在り方。

・因什摩 僧は師の指示を得たと思ってそれによりかかろうとしたわけだが、わしは何の指示もした覚えはないとつっぱなしているのである。つまり師の時中と僧の時中とはかかわりはない。僧の時中は僧自身のものである。それなのにわしの時中によりかかろうと云うのは何ごとだ、と云うのである。

雲岳、地を掃く次いで、寺主を叫ぶ。問う、何ぞ自ら駈駆たるを得るや。岳云く、人の駈駆たらざる有り。寺主云く、何れの處にか第二月有りや。岳、筭を提起して云く、這个は是れ第幾月ぞ。玄沙代わって云く、此は由お是れ第二月。報慈拈じて師に問う、忽然^{もし}

掃箒を放下する時は作摩生か道わん。師云く、大家、喫茶し去れ。

雲岳和尚は掃除をしている時、寺主を呼んだ。寺主が問う、よくもまあそんなにバタバタできるものですね。雲岳が云う、バタバタしていないのが居るぞ。寺主が云う、どこに第二月があるというのですか。雲岳は箒をひっさげて云う、これは第何月だ。玄沙が代語して云う、それはなお第二月だ。報慈がこの話をとり上げて師に問う、箒をおろした時にはどう云いなさるか。師が云う、じゃあ皆さんお茶飲みに行きなさい。

・第二月 円覚経「云何無明。善男子、一切衆生、從無始來、種種顛倒、猶如迷人四方易處、妄認四大為自身相、六塵緣影為自身相、譬如彼病目見空中華及第二月」。寺主は雲岳が不駈駈として措定したものを第二月としているわけであるが、それに対して雲岳は寺主自身がすでに措定している駈駈たるものは第何月だと云って、第二月を寺主に突っ返している。寺主が無対であったのはその点が解らなかつたからであろう。玄沙の代語はその点をあつさり指摘しているわけである。報慈の拈問は、雲岳がもし箒を放下して這个是第幾月と問うたらどうこたえるかというのであるが、第二月を師に手渡そつとしている点では、雲岳のそれと変わりがない。そこで師はお茶飲みに行けといつて受け流したのである。なお雲岳の伝を参照。

師、頌有りて曰く、好心もて相待つも人の悉する少し、開門来去するも何の了期あらん。如かず同風の事に達取して、我自ら修行し我れ自ら知らんには。

- ・ 好心 前負に見える上堂を参照。
- ・ 同風 漢書、終軍傳「今天下為一、萬里同風」。萬里の彼方に自分と同風の人が居るといふ期待。
- ・ 我自修行自知、南泉語要「佛不會道、我自修行」。

問う、如何なるか是れ客中主。師云く、識取せば好し。如何なるか是れ主中主。師、良久す。僧曰う、客中主と相い去ること多少ぞ。師云く、作摩。

問う、客中の主とはどういふものですか。師が云う、識てとつてほしいものだ。主中の主とはどういふものですか。師、良久する。僧が云う、客中の主と主中の主とのちがいはどれほどでしょうか。師が云う、なんだと。

・伝灯録卷十五洞山の伝、「師問僧、名什麼。僧曰、某甲。師曰、阿那箇是闍梨主人公。僧曰、見祇对次。師曰、苦哉苦哉、今時人例皆如此。只是認得驢前馬後將為自己、佛法平況、此之是也。客中辯主尚未分、如何辯得主中主。僧便問、如何是主中主。師曰、闍梨自道取。僧曰、某甲道得即是客中主。如何是主中主。師曰、恁麼道即易、相續也大難」。祖堂集卷二十
隱山和尚の伝、「洞山便問（隱山）、如何是賓中主。云、白雲蓋青山。如何是主中主。云、長年不出戸。賓主相去幾何。云、長江水上波。賓主相見有何言說。云、清風拂白月」。以上の問答をふまえたものであろう。

・識取好 客中主であるおまえさん自身を見てとつてほしいものだ。

・作摩 客中主、主中主とかるがるしく質問するが、おまえさんわかっているのかと質問を押しかえたもの。

問う、古人道えらく、山下檀越の家に一頭の水纂牛と作り去る、と。未審し此の理如何ん。師云く、闍梨何んぞ被毛載角し去らざる。僧云う、直得与摩なるも還た相い応ずるを得るや。師云く、吾は早く曾つて多劫の修を経たり、是れ等閑に相い狂惑するならず。問う、山下の檀越の家で一頭の水纂牛となる、と古人が云つております。これはどういふことでしょうか。師が云う、おまえさん、何んで被毛載角しないのか。僧が云う、たといそうしたところではびたりとかなうことができるでしょうか。師が云う、わしはもう長い間修行してきた。おざなりに惑わされたりはしない。

・山下檀越家云々 趙州録卷上「師問南泉、知有底人向什麼処去。泉云、山前檀越家、作一頭水纂牛去。師云、謝和尚指示。泉云、昨夜三更月到窓」。

・何不被毛載角云　なぜ水纂牛にならないのか。

・直得与摩云々　水纂牛になったところで道にかなうのでしょうか。

・吾早會經多劫修云々　伝灯録三十永嘉眞覺大師證道歌「有人問我解何宗、報道摩訶般若力。或是或非人不識、逆行順行天莫測。吾早會經多劫修、不是等閑相誑惑」。

問う、个の什摩の業を作さば、南泉の路に称い得ん。師云く、水纂牛と作り去れ。僧云く、什摩としてか此くの如くするや。師云く、常住を宦かんが為めなり。

問う、どんな修行をしたら、南泉の路にかなうことができるでしょうか。師が云つ、水纂牛になってもらん。僧が云つ、なんで水纂牛になるのですか。師が云う、常住物を引くためだ(お前を牛としてこき使つためだ)。

問う、問あり、答あるは則ち宗風に当たらず。只だ宗門中の事の如きは如何ん。師、良久す。僧云く、若し是くの如くならざれば、争でか此くの如くなるを知らん。師云く、也た是れ半路の人なり。

問う、問答するのは宗風にかないません。宗門中の事とは何ですか。師は良久する。僧が云う、もし良久されなかつたら、宗門中の事がそのようなものであると、どつしてわかりましょう。師が云う、やはり路の途中の人だ。

・只如宗門中事如何　問答を離れたところで宗門中の事をずばりと示してください。

・也是半路人　この僧ははじめから斜に構えた質問の仕方をしているが、師が良久してみせたのに対して、うわずった一人よがりな応じ方をした。師の「半路の人」とはそこをついたものである。

問う、六門未だ息まざるに、如何んが有るを知らん。師云く、六門とは是れ什摩ぞ。

問う、六門が休止していないのにどうして有ることを知りましようか。師が云う、六門とは一体何なのだ。(何だとして問題にしているのか)

・六門 六根に同じ。

・知有 入矢『抛居士語録』一〇七頁以下参照。この質問は「知有」が、休止したものの、静的なものであるという前提に立っている。

問う、十二時中、如何んが道と相い応せん。師云く、造作すること莫かれ。僧曰う、時中を争奈何せん。師云く、時中とは是れ什摩ぞ。

問う、十二時中、どのようにしたら道とひとつになるでしようか。師が云う、はからいをしてはならん。僧が云う、十二時中をどうしましよう。師が云う、お前の云う十二時中とは何なのか。

・莫造作 十二時中というわくつけの中から離れる。十二時の中にあつて自由になること。

・時中は什摩 誰の時中を問題にしているのか。

問う、大蔵教中に還た宗門の事有りや。師云く、是れ什摩ぞ。進みて云う、如何んが是れ宗門中事。師云く、電聲甚だ大なるも、雨点全く無し。

問う、大蔵經中に宗門の事があるでしようか。師云く、一体何の話だ。一步進んで云う、宗門中の事とは何ですか。師が云う、雷声は甚だ大きいのに、雨滴がちつとも落ちてこん。

・是什摩 何であるか。何だそれは。問題の根源へ目を向けさせるための問い。

・雷声甚大 質問をするだけで、ちつとも手がこがえない。「是什摩」と言われた意味がわからず、再び宗門中の事を尋ねた

ことを指す。

育王和尚、曹山に嗣ぐ。衡州に在り。師、號は弘通、洪州高安縣の人なり。青林寺に出家し、依年具戒す。

曹山に参見す。曹山問う、近ごろ什摩の處をか離る。師云く、近ごろ明水を離る。曹山云く、作摩生か這裏に到るを得たる。師云く、明に遇えば則ち行き、暗に遇えば則ち止まれり。曹山、之を肯う。

曹山に参じる。曹山が問う、どこからやって来たのか。師が云う、明水から来ました。曹山が云う、どのようにしてここにたどりつけたのか。師が云う、明るくなれば行き、暗くなれば泊まりました。曹山はこれを肯った。

池れ自り逍遥雲水す。のち衡嶽の育王に棲み匡化す。楚王欽仰し、三たび使人を降して迎請す。師、誓つて従わず。林巒に處り、寄りて光景に安んぜんことを願う。

師、時有りて上堂して云く、釈迦如来、靈山会上に在りて四十九年説到底の句を、今夜某甲著恥を避けず、諸尊者と共に談ぜん。師、頃間して云う、錯まりて道著(原作者)することなかれ。珍重。

師がある時、上堂して云う、釈迦如来が靈山会上で四十九年間説ききれなかつた句を、今夜わしは恥をもちえりみずにあなた方と談じよう。師はしばらくして云う、間違つて言つたりなどしてはならんぞ。おだいに。

紫陵和尚、花巖に嗣ぐ、襄州に在り。

問う、如何なるか是れ毘盧の師。師云く、木馬の呼吸は和して同じ難く、被毛戴角は終に契い難し。

問う、毘盧の師とは何ですか。師が云う、木馬と同じように呼吸するのは出来ない話だし、畜生道にはとても契合できない。

・毘盧師　いわゆる仏向上事。洞山録参照。

問う、如何にしてか自己佛を識得せん。師云く、一葉の明時消し盡さず、松風の韻節人無きを怨む。

問う、どうしたら自己という仏を見て取ることができましょうか。師が云う、一葉の聖代は享受してもしつくせない、松風のひびきは聞き取る人がない。

・自己佛　伝灯録卷十、黄州齊安和尚の伝に「僧問、如何識得自己佛。師曰、一葉明時消不盡、松風韻罷怨無人。僧曰、如何是自己佛。師曰、草前駿馬實難窮、妙盡還須畜生行」とある、ちなみに齊安は前華嚴寺智蔵禪師法嗣となっている。

・一葉　明時にかかる言葉としては奇怪である。

・韻節　見慣れない語であるが、しばらく訳のような意味に解しておく。なお伝灯録の韻罷は一層わからない。

・師の答えは享受しつくせない聖代、聞き取る人のいない松風のひびきのようなが自己仏だといっているのである。

問う、如何なるか是れ王子王宮を捨てて出家出世するの事。師云く、珠輪曠劫も實に窮め難く、毛頭より血を滴らすも終に契い難し。

問う、釈尊が王宮を捨てて出家し世を棄てたといつことはどういふことですか。師が云う、久遠にも窮めがたい珠輪のため、全身の毛穴から血をしたたらせても契劫することのない修行のためだ。

・珠輪　不明。

師、上堂して云く、古琴普く視る目前の音、誰人が和し得ん無絃の曲。学人対えて云く、千機千奏(原作湊)す空王の曲、無絃の古格妙にして窮め難し。

師が上堂して云う、万人の目の前に古琴の音の現在していることはあらゆる人の見るところであるが、しかし誰がこの無絃のしらべに和し得るであろうか。学人がこたえていう、千人が千人のやり方で空王の曲をかなでます。しかし無絃の古きしらべは微妙で窮めがたい。

・古琴普視目前音 音を視るといふのは可怪しい。視の字は何かの誤りと考えられる。或いは、目前としたため、それに応じて視の字を使ったのであろうか。

・無絃曲 陶淵明の無絃琴の故事。

・空王 仏陀のこと。

長興和尚、華嚴に嗣ぎ、鳳翔府に在り。

・鳳翔府 原文には鳳翔府とある。今改む。

周太傳問う、未審し、大師、年多少ぞ。師云く、五六四三類するを得ず、豈に一二に同ぜんや實に窮め難し。

周太傳が問う、和尚さんお年は幾つですか。師が云う、五にも六にも四にも三にも似ていない、一や二に同じかろうかまことにはかり知れない。

・周太傳 不明。

・師の答えは、師の年齢は一切の数のカテゴリーにはまらないということ。なおこれと同じ問答が、先に言及した黃州齊安の伝に出ている。

報慈和尚、龍牙に嗣ぎ、潭州に在り。師、葺嶼と号す。鎮州の人なり。初め趙州に参じ、次いで龍牙に礼す。密に玄関に湊し、便ち湘江に駐りて、更に他往無し。楚王欽敬し、報慈に住して妙旨を敷揚せんことを請う。紫を賜い、匡化大師と號せしむ。

・葺嶼 原文に葺嶼嶼とある。今改む。

僧問つ、心眼もて相見ゆる時如何ん。師云く、心汝に向かつて什摩と道いしや。

相が問つ、心眼で師にお会いしておりますが、いかがですか。師が云う、心はお前に向かつて何と云ったか。

・僧の問いは、和尚さんの心眼を拝見させて貰いましょうというのであろう。それに対して師は、一体お前の云つ心眼の心とは何なのだと切りかえしている。

問う、如何なるか是れ實見の處。師云く、絲毫も隔てず。僧曰く、与摩ならば則ち見るなり。師云く、南泉、甚の好處なんにか去れる。

問う、如実に見るとはどういうことですか。師が云つ、髪一すじへだてない。僧が云つ、それこそ如実に見ることです。師が云う、南泉はなんといい好い處へ行ったものだ。

・南泉甚好処去 甚は感嘆詞。

・南泉のどつうという故事を指すのが解らないので、全体の意味が読みとれない。祖堂集十七、五二四頁参照。

問う、如何なるか是れ学人の自己。師云く、耳裏の風雷、眼中の星月。僧云く、学人會せり。師云く、汝道え、釈迦老子、眉毛長ずること多少ぞ。

問う、わたしの自己とはどんなものですか。師が云う、耳の中に風雷があり、眼の中に星や月のあるものだ。僧が云う、わかり

ました。師が云う、わかったんならお釈迦さんの眉毛がどの位の長さか云ってみる。

後の疎山和尚、先の疎山に嗣ぐ。杭州に在り。

撫州の李大傳、師を請うて疏す。伏して以んみるに法眼鬚珠微妙にして乃ち佛日に明らかなり。心燈祖印、伝来して別に人間に在り。之を得る者は瓦礫も金と成り、之を悟る者は醍醐灌頂す。一乗の良玉叮嚀し来たるに雙林よりす。六祖伝依し、血脉広く百代に流る。只だ煩惱を將つて便わち菩提を證す。精んぞ智もて知るべけんや、良に擬議し難し。先の疎山大師、水中の月を以て物外に談ずること四十餘年。百千の徒衆、日に東する者は滄溟のごとく浩渺たり、岱北なる者は劬抹に斉しく攀ず。四遠より参尋するや一言に道断す。今は則ち光、異地に流れ、月、別天を照らす。故に疎嶺の蕭條たる連雲の霞蓋を望む。長老和尚、玄珠自ら暁かに、慧劔方に新たなり。能く滋想の源をして便ち真如の地を證せしむ。願わくば法雨を將つて普ねく人天を潤さん。冀くば最勝の縁に憑り、上は皇王の福を薦めん。幸わくば衆請に従原作徒い、人心を阻むこと勿かれ。謹みて疏す。此れに因りて疎山に住せり。

師、行脚の時投子に到る。投子問う、近ごろ什摩の處をか離るる。对えて云く、近ごろ延平を離る。投子云く、還た劔を將ち得來たるか。对えて云く、將ち得來たる。投子曰く、老僧に呈似し看よ。師、乃ち面前の地上を指す。投子便ち休し去る。三日の後、侍者に問う、這个の師僧在りや。侍者云く、去れり。投子云く、三十年騎馬を学びしに、昨日驢に撲せられたり。

師が行脚している時、投子の処へ行った。投子が問う、どこからやって來たのか。師が答えて云う、延平からやって來ました。投子が云う、劔を持って來たか。答えて云う、持って來ました。投子が云う、わしに見せてみる。師はそこで目前の地を指した。投子は問答をうち切った。

三日経って投子が侍者に問う、あの師僧は居るか。侍者が云う、行ってしまわれました。投子が云う、三十年間も騎馬を習ってい

るのに、先日は驢馬にほうり出されたわい。

・延平 不明。劍の産地であるのかもしれない。

・指面前地上 ほらここに劍があります、という身振り。

問う、如何なるか是れ事に就きて学ぶ。師云く、著衣し掃地す。如何なるか是れ理に就きて学ぶ。師云く、騎牛し去穢す。向上の事如何ん。云く、溥際、収まらず。

問う、事に即して学ぶとはどういうことですか。師が云う、衣を着て掃地する。理に即して学ぶとはどういうことですか。牛に乗って穢を抜う。仏向上の事とはどういうことですか。はてがなくて収まらない。

・着衣掃地 日常の作用全般を指して答えたもの。

・騎牛去穢 清浄な理の世界、清浄法身を象徴したものであろう。何か典拠があるのかもしれないが不明。

・溥際不収 向上の事は限定できないもので手がつけられない、というのがおおよその意味であるうが、よくわからない。

「溥」は或いは「傳」の誤りであるのかもしれない。

問う、如何なるか是れ聲色中に混融する一句。師云く、弁せずして消し及ばず。如何なるか是れ聲色外に別行の一句。云く、逢い難く、得べからず。

問う、事象世界に混融している一句とはどういうものですか。師が云う、それと識らなければ使いきれない。事象世界の外で別行する一句とはどういうものですか。師が云う、そんな一句には逢いにくいし、手に入れることもできない。

・別行 教外別行の別行。

禾山和尚、九峯に嗣ぐ、洪州に在り。師、号は無殿、福州連江県の人なり。姓は呉、雪峯山に於いて出家す。纔かに尸羅を具するや便ち祖道を尋ぬ。恥越を出離し、遍く宗筵を歴して九峯に造る。一言にして頓に心源に契い、万水に別月を疑うことなし。因みに十一位集、数百言を編む。求むる者、門を填むも、師多く秘要す。

・万水無疑於別月 どのような水に映っていても、月は同じ月である。自己の本分に徹して動じない。

師、一日に於いて、辞して他に往きて遊ぶ。九峯乃ち偈を与えて送りて曰く、寶を將つて寶に類うて意殊らず、琉璃もて線貫す琉璃の珠。内外雙びに通じて異逕無し、我が家園の桂一株を鬱たらしめよ、と。師初め禾山に住し、次いで祥光、翠巖に居す。辛亥の歳に於いて、勅賜して、洪州護国に住持し、登源禪師と號せしむ。

・九峯の偈 (われと汝とのあいだには)宝と宝とをならべたように心は一つであり、琉璃の糸で琉璃の珠をつないだように一つである。内と外とに違いはない、そのような我が家園のひとつもとの桂をより見事にしげらせて呉れ。

・辛亥 九五一年、祖堂集の出来る一年前のこと。禾山和尚は当時存命である。

師、時有つて良久して云く、自作自受。

師はあるとき、(上堂して)ややあつて云われた、自分の播いたたねは自分で刈らねばならない。

・自作自受 正法念處經卷十七「汝於前世作衆惡、此業今當還自受。自作自受不為他、若他所作非己報」。師のこの短い言葉はいろいろな意味にとれるであらう。しかし高座にのぼつて思はずもらしたつめきには違ひなからう。

或る時、僧の門を入り来たるを見て云く、顛を患うか、那作摩。僧便ち問う、未審^{いぶか}し、過什摩の處に在りや。師云く、是れ蕭逸ならざれば争でか蘭亭を取らん。

ある時、僧が門を入って来るのを見て云った、お前氣狂いにもなったのではないか、どうだ。そこで僧が問う、わたしのどこが悪かったのですか。師が云う、蕭逸でもないのに蘭亭の序が盗み取られるものか。

・蕭逸 蕭翼、唐太宗の時の觀察御使。

師云く、諸の兄弟、且く二言三語すること莫れ。且らく禾山、汝がために證明するを待て、諸人會するや。大いに難し。如今第一及ばず第二到らず。須らく言語指帰有りて諸人に話出し、便ち領覽有らしむべし。且らく葛藤して東説西説するを恠しむ莫れ。可に聞かず、釈迦座上に在りて良久す。衆は指帰を斫つ、其の時遜子出で来たり、乃ち白槌して云く、大衆當に法王の法を觀すべし。又云く、法王の法は是の如し、と。佛當時に便ち坐を下り去る。諸人道え、此の一言を致すこと合に校すべきこと多少ぞ。亦た闍王の如き、迦葉に説法せんことを請う。乃ち請を受けて坐に登り、良久して乃ち下る。王乃ち問う、師は何を以て弟子の為に説かざるや、と。迦葉云く、位崇く名重ければなり、と。當時亦た紘紘たる者有り、如今盡く會し了れり。棄道え、古人意作摩生。八十老翁場屋を出ずること還た知れるや。時に人有つて問う、迦葉當時の意作摩生。師云く、覺えず時の遷變するを、蕭然たり洞底の風。

師が云う、諸君よ、ああ云つたりこつ云つたりしなさんな。このわしが諸君のために証拠だてるのを待ちなさい。しかし諸君に解るだらうか、大変なことだ。いまとつてい説きおよべないことだが、言葉で指示して諸君のために話して、理解させねばならぬ。あれやこれやと御託を並べてなんだと思わぬでもよいぞ。聞いている筈だ、釈迦は高座の上で黙っており、大衆は指示を待っている。その時舍利弗が出て来て白槌して云う、大衆よ、法王の法を觀よ、と。又た云う、法王の法とはこんなものだ、と。すると佛はすぐに座をおりてしまった。諸君云つてみる、舍利弗の一言は釈迦の指示とどれくらいずれているとすべきか。

またこんな話もある、阿闍世王が迦葉に説法せんことを請うた。すると迦葉は請に應じて高座に登ったが、ややあつて座を下りた。そこで王が問う、師は何故わたしのために法を説いて下さらないのですか。迦葉が云う、王は位も名も尊いからだ。その時にも迦葉の意について理解の仕方が紛糾した。いまわしには解っている。諸君云つてみる、古人の意はどうだ。八十の老翁が科拏の

試験場を出るといふことがあるぞ。時に一人の修行僧があつて問う、迦葉のその時の意はどうですか。師が云う、時の経つのも知らぬままに、洞の底からする物さびしい風の音を聞いている。

・致此一言 原文には置此一言とある。今、置を致に改めて読む。

・八十老翁出場屋 伝灯録卷十七雲居道膺の伝に「八十老人出場屋、不是小兒戲」といふ語が見える。今は古人の意を道ふことの難しさをいふのであろう。

・この段に見える二つの物語りの出処は不明。

又の時に僧を見て云く、還た禾山の悪發するを知れるや。僧便ち問う、和尚、無端に悪發して什摩をか作す。師云く、嗔拳は笑面を打たず。

又、ある時、僧を見て云う、禾山が腹をたてているのがわかるか。僧が問う、和尚さん、突拍子もなく腹をたてられてどうなさつたのですか。師が云う、腹をたててふりあげた拳でも笑い顔は打てん。

・嗔拳不打笑面 こちらの怒り(機用)が質問僧に機能しないことを指して云つたのであろう。会元卷十五、泉州雲台因禪師の伝「僧問、如何是和尚家風。師曰、嗔拳不打笑面。曰、如何施設。師曰、天台則有、南嶽則無」。事物起源博楨嬉戯部「江淮之俗、毎作諸滴、必先設嗔拳笑面」。遊び場に皆のいましめに嗔拳笑面の人形を置く。負けたからといって怒らないように。

乃ち承いて云く、大いに容易ならず、諸の和尚見ずや。他の古老は、接示、一開一合せば便ち悟るを。此れは是れ有情中の方便なり。更に靈雲の桃花を見、仰山の天雲を見ることあり。此れは是れ無情の物、什摩に応じてか、便ち解く人をして得入せしむる。思想する底の事を成すこと莫からんや。(嫌うことなかれ)古徳の夙根は懸鐸に相似て触著せば則ち応ず。是れ与摩の根器にして始めて得

ん。更に帰宗の鼎を敲き拳を竖つること、布毛を拵み、拂子を抛つこと、用に當たりて用無く、旒啄の機の如きものあり。是れ他の上上の流にして始めて得ん。

そこで笑つて次のように云う、ああ難しいことだ、おまえさん方は知っているだろう、かの古徳によつて卷舒の機用が開示されるととたんに悟る。これが有情中の方便である。更に靈雲が桃の花を見、仰山が天雲を見て悟つたことがある。これは無情の物が何に呼応して人を悟入せしめることができるのであろうか。(うっかりするとその物についてあれこれと思惟し、意味付けすることになりはしないだろうか。古徳のすぐれた根機はあたかも懸けられた鐸にも似て、打てば響くのである。ほかならぬこのような根機であつたからこそ、びたりとかなつたのである。更に帰宗が鼎の蓋を敲いたり、拳をつき出したりしたことや、衣の端をつまんだり、拂子を抛つたりして、ちゃんと機用していながらそのようではなく、旒啄の機のようなものがある。(これは)かの最上の根機の人にして始めてびたりといくのである。

・大不容易 直接にはこちらの機が相手に受用されにくいことを指す。

・一開一合 開合は、卷舒。收斂と展開、把住と放行、と同じく自在の機用を指す。

・靈雲見桃花 祖堂集卷十九の靈雲和尚の伝参照。

・仰山見天雲 典拠不明。

・成思想底事 無情の物(直接には前の桃花や天雲を指す)が何を意味しているか、という風な、その物をワク付けするような思惟に墮する危険があるだろうということ。

・莫嫌 前後の文脈から考えると、ここに「莫嫌」という二字があるのはおかしいので省く。

・帰宗敲鼎豎拳 祖堂集十五の伝参照。

問う、只だ物に因りて便ち得入する如きは意如何ん。師云く、魚透つて一撃を仮るも、龍に変彩の身無し。

問う、物に因つて悟るといふ場合はどういふことですか。師が答えて云う、(龍たらんとする)魚は、三関を透り、水を撃つて躍りはするが、(もともとその魚には龍としての本分が備わっているのであつて)ことさらに変容して龍としての紋彩キャラクタースティックを身にまとつてのではない。

又の時に僧を把住して云く、去けば則ち住し、住せば則ち死す。快かに道え、快かに道え。是れ汝、還た具眼すや。如今、一等に是れ乱説す。可に聞かざるや、六祖が讓大師に問いしときの、嵩山より来たると不汚の語と、神会和尚の本源仏性の理とを、古徳は配して云く、一人は祖師の意を会し、一人は大教の意を会す、と。諸人道え、是れ誰か此くの如く解会するや。須く是れ鵝王の作にして始めて得べし。

又たある時、僧をつかまえて云う、行けば止まることになり、止まれば死ぬのである。さあ言え、さあ言え、いつたいおまえさんはちゃんと眼を備えているのか。当今は、誰れもが同じように、でたらめばかり言っている。聞いているだろつ、六祖と懷讓大師との問答で、懷讓大師が、嵩山より来たる、修證は即ち無きにあらず、汚染することは即ち得ず、と答えた語と、神会和尚の是れ諸仏の本源、神会の仏性、と言つた道理とをつきあわせて、古徳は、一人(懷讓)は祖師の意がわかり、一人は最高の教字の意がわかつている、と言っている。おまえさん方言つてみよ、いつたい誰がこのようにわかることができようか。鵝王の作略のある人にしてはじめてできるのだ。

・從高山来 祖堂集卷三、伝灯録卷五の懷讓大師の伝、六祖壇經機縁第七)などの問答を参照。

・本源仏性 伝灯録卷五の神会の伝、六祖壇經頓漸第八)、曹溪大師伝などを参照。

・鵝王 祖庭事苑五「正法念経云、譬如水乳同置一器、鵝王飲之、但飲其乳汁、其水猶存」。

汝見よ、華林、匠山に問わる、専甲、喚びて這个の銅瓶と作す。師叔は喚びて什摩と作すや。華原作尽(林云く、我れは終に喚びて

木晤と作さず。匠山乃ち云く、与摩なれば則ち専甲は匠山の主も也た且つ受用せん。是原作具れ誰か有らざらん、什摩に因りてか此くの如き。

さあ見てみよ、華林が匠山に問答をしかけられた、私はこれを銅瓶と喚びますが、師叔は何と喚ばれますか。華林が答えて云つ、わしは強いて棒切れとは喚ばん。匠山はそこで云つた、では私は匠山の主としてまあやつていきましよう。と。誰だつてそれはある、何故そうなのか。

・専甲喚作這銅瓶 これは「専甲喚這銅瓶」でなくてはおかしい。後の道吾と雲岳との問答についても同じ。

又た如えは、雲岳、道吾に問う、専甲は喚びて這銅の草鞋と作す。師兄は喚びて什摩と作すや。吾云く、棄若し喚びて草鞋と作さば則ち胸を鞭うち脊を打たん。岳云く、未審し、師兄、喚びて什摩と作すや。吾云く、喚びて木晤と作すべからず。且く道え、此の處還た分るるや、太だ辨白するに易からず。須く是れ龍睛原作精し鉄眼にして始めて得べし。

また雲岳が道悟に問うたことがある、私はこれを草鞋と喚びますが、師兄は何と喚ばれますか。道吾が答えて云つ、おまえさんが草鞋と喚んだら、胸や脊を打つて罰を加えよう。雲岳が云つ、師兄は何と喚ばれるのですか。道吾が云つ、棒切れと喚ぶことはできん。まあ言つてごらん、この同じように、棒切れとは喚ばない、と言つてるところをどう見分けるのかを。はっきりと判別することは非常にむずかしい。龍睛鉄眼を備えた人にしてはじめてできるのだ。

・龍睛 鉄眼に合わせて龍睛を龍睛に改める。

・この問答の出典は不明。

問う、未審し、此の二人は同か別か。師云く、門外に主を見ず、入室して始めて知音。

問う、この二人の見解は同じなんでしょうか、異なっているのでしょうか。師が答えて云つ、門外の漢は主人を見ることはでき

ない、入室してこそ知音となるのである。

・此二人 華林と道吾。懷讓大師と神会を重ねた質問。

諸の和尚は是れ天生自然にあらず、吾も聖人に非ずして事を経て多く知る。此れ今の門中も也た須く精確に親近すべし。高格なる者は言語を断ずべからず。若し是れ聲聞の輩なれば則ち取捨の理あり。若し是れ全収なれば一法をも取らず、一法をも捨てず。かたじけな 佐や

偏見無し。皆な来往の次を取りて、方めて有無を知る。若し也た通ぜざれば如何んが弁識せん。一には須く自己、分明広大なるべし。

二には時中に行と位と相い資くべし。三には道友に傳(原作博)附せよ。若し道友無くんば、向去、如何んが成立せん。

おまえさんは天性自然に具備しているのではない。わしも聖人ではないから、経験によって物知りになるのだ。この宗門中の事についてもやはりそれとしっかりと密接でなければならぬ。高い境地にある者は言語を断つてはならない。もし声聞の根器の者であれば、取捨して分別の理をたてる。そうでなくて、もしそれをまるごと受用するということであれば、一法をも取らず一法をも捨てずというふうでなくてはならない。そうであつてこそめでたく偏見が無いということになる。すべて来往の次を取つて、その有無を知るのである。もし以上の消息に通じなかつたならば、どうして見分けられようか。第一には本来の自己が明々白白々として広大でなければならぬ。第二には四六時中、行と位とが互いの資とならなければならぬ。第三には道友と親しむように。もし道友が無かつたならば、今後どうして一人たちできようか。

・皆取来往之次 「来往の次を取る」ということは、先の「経事多知」と同じ方向を指すであろうが、その意味は分明ではない。

・弁識 「弁識」は先の「且道此處還分也無、太不易辨白」を弁識することを指す。

豈に見ずや、石霜和尚、雲岳に到る。雲岳問う、什摩の處より来るや。對えて云く、匠山より来る。岳云く、棄は匠山に在ること多

少の時なるか。对えて云く、五六夏なり。岳云く、与摩なれば則ち是れ山長なり。对えて云く、某甲、彼中かしこに在りと雖も、却つて知らず。岳云く、他家も也た知に非ず、識に非ず。石霜、後ち道吾に到り、乃ち前縁を挙す。道吾乃ち聲を抗げて言く、争でか与摩に佛法の身心無きことを得んや。且く看よ、古人、什摩の處か是れ佛法の身心無き處なる。好手も亦た奈何ともせず。恰かも 樓林兄弟に似たり。学處通ぜず、只だ一問一答、言語の往来に執するのみ。

聞いているであろう、石霜和尚が雲岳のところへやって来た。雲岳が問う、どこからやって来たのか。答えて云う、匠山からやって来ました。雲岳が云う、おまえさんは匠山にどれほど居たのか。答えて云う、五、六夏です。雲岳が云う、ではあそこの主人だな。答えて云う、私はあそこには居りましたが、何もわかりません。雲岳が云う、彼匠山だつて知りもわきまえもしないさ。石霜はその後、道吾のもとへやって来て、雲岳との問答を話した。道吾はそこで怒つて声をはりあげて云う、どうしてこのように、佛法の身心が無いことができるのか。

さあ見てみよ、古人のどこが佛法の身心が無いと云われる点であるのかを。それは名づつてのやり手でさえ、どうしようもないほどのものなのだ。おまえさん方によく似ていよう。学ぶべきところがわからず、問答をしたり、言葉をやりとりすることに拘泥しているだけなのだ。

・ 非知非識 雲岳が「非知非識」と云うのは単なる「非知非識」ではなくて、高い次元のものとして云っているであろう。
・ 無佛法身心 好手でもいかんともしがたいという強い否定の意味を持つ。雲岳の「与摩則是山長」と「他家非知非識」を指したもの。

殊に知らず、亦た時中間答有り、分ちて三般と為すことを。一には、現に縁に対して機に處して縦奪す、亦た名づけて問答と為すことを得。二には、亦た心を擬する是れ問、續つがざる是れ答なる有り。是れ薬病の語なり。三には、無問の問、無説の説なる有り。這个は宗門の正問正答の路なり。又た類同す可からず、事須すべらく甄別べつすべし。若し提叉を論ずれば即ち是れ單行。若し収人を道わば須

らく路布を承くべし。

乃ち僧有りて問う、未審し此の三般分るるや分れざるや。師云く、物のために縊素を明む、誰か知らん、路迷に涉るとは。

とりわけ、三種類の時中間答があることを知らない。一には、現に縁に対して機に応じて抑揚することである。これも問答といふことができる。二には、志向のあるのが問であり、志向を絶つのが答である、というのがあつた。これは病に対する薬のよつた言葉である。三には、無問の問、無説の説といふのがあつた。以上が宗門における正問正答の行き方である。三者を混同してはならない。しっかりと区別せねばならない。(中略)ある僧が問う、この三種類の時中間答は分けることができますか、できませんか。師が云う、衆生のために白黒を明らかにしてやったのに、なんとまた路に迷っている奴がいたとは知らなかつた。

・時中間答 禾山和尚に特有の用語である。時中は十二時中、本巻冒頭の荷玉和尚の伝を参照。

・現対縁云々 言葉なしの対応をいふものであつた。

・擬心是問、不續是答 卷六洞山の伝に「問、如何是病。師曰、字起是病。進曰、如何是藥。師曰、不續是藥」(二五六頁)とある。擬心は心念の字起に他ならない。不續はその心念に継がないこと。積極的に云えばその心念を絶つこと。藥たるゆえんである。

・若論以下 よくわからない。提又は手の上にものを載せて重さをはかること。単行は正問正答それ一本。収人は捕手だといふ説もある。

・路布 露布の誤りかとも思われるが、それにしてもわからない。

・為物 物と為りて云々と読むこともできる。その場合には、およそものたるものは白黒がはっきりしていて、自分の行く方向を見失つなどということは知らぬことである、という意味になる。為物の為は去声に読む方が読みやすい。

師云く、取次にすること莫くんば好し。禪師は作ること難し、須らく是れ其の人たるべし。若し直下に當荷し得ざれば、也た須ら

く三十二年、樓林に淹^ひする氣拍の漢にして始めて得べし。縦い大用現前せざるも、亦た是れ腴璞なり、豈に八月の冬瓜と同じからんや。什摩の霜雪をか銷^もいん。

師が云う、いいかげんにしない方がよいぞ。禪師というものはなりがたいものだ、しかるべき人でなければならぬ。もしびたりと背おい切ることができなければ、二十年三十年と樓林にどっぷりつかっている氣拍の漢であってはじめてその資格がある。たとい大用現前しなくともなお腴璞だ。どうして八月の冬瓜みたいなことがあるう。霜雪をくぐる必要はないのだ。

・氣拍漢 他に例を見ないが、内部に張りつめたものを持っている漢ということであるうか。

・腴璞 冬瓜は霜雪をくぐって熟するという。銷は須と同じ意味。

一種に葛藤し將ち去らば、且らく聴す、亦た人の耳目を清ましめ、東引西證することを。忽ち古徳の光賢に因らば便ち見處有らん。

同じ葛藤して行くつといつのなら、まあ人の耳目をそばだてるようにして東引西證してもよからう。ある古徳や大いなる賢者の因縁がふと契機となつて、ある見處が生まれるかも知れない。

豈に是れ上に足^くふれば足らず、下にくらぶれば餘り有るならざるや。

帯に短したすきに長しではないか。

若し因果を撥無すれば、便ち般若を誇り、佛身血を出すに同じ一般なり。此の誇りも亦た須らく區分すべし。第一、現今、自己即ち佛なることを信ぜず。何れの處にか生滅壞爛の身の佛道を成ずることを得んや。此くの如きの輩亦た出佛身血に同じ。喚んで破和合僧と作す。

第二、曠大劫來、無明相隨、業に習いて顛倒す。須らく今日念を息め、眞に歸し、生死を壊除し、六根銷落すべし。亦た今時の謗と爲すことを得。謗とは是れ毀の異名なり。始めて無問を得。豈に見ずや、古徳云く、無問にして自説すと。乃ち問うて云く、問有らば還た説くや。師云く、若し不問の時は則ち一切に説く。所以に先徳云く、古人百説して一問無しと。今時は百問して一説無し。蓋し明知力未だ充たざるを以てなり。

・謗是毀之異名也 後人のコメントが雜入したものであろう。

・始得無問 この一句前後につづかない。このあたり原文にかなりの混乱があるようである。

・豈不見以下 次の第三云々の直前までの部分が、謗の区分の第二といかなる内的かかわりを有するか把握しがたい。

又た僧有りて古老に問う、如何なるか是れ百問して一説無き。答えて云く、黒雲變讎。如何なるか是れ、百説して一問無き。答えて云く、青天の朗月。師云く、可あに聞かずや、僧洞山に問う、問有らば則ち答有り。不問不答の時如何ん。洞山答えて云く、持齊して肉羹を喫す。曹山云く、酒を喫し、肉を喫す。只だ曹山の如きは亦た此の問を石霜に致す。石霜乃ち對えて云く、尺を折らず。師云く、大いに會すること難し。拳する者は多く、弁ずる者は少し。

・折尺 不明。

・古老 洞山。二 五八頁。

第三、自己本生の父母有るを知るも、知解有るが爲めに却つて宦過もちを須う。亦た喚びて大謗と作す。見ずや、當時、亦た人有りて南山に問う、般若を謗する底の人還た過有りや。答えて云く、作摩か無からん。師云く、道うを見ずや、父を殺し、母を害す、佛身血を出だす、和合僧を破ると、是れ過にあらずして是れ什摩ぞ。

僧問う、古人云えらく、人の飯を喫せざるが如し、と。未審いぶかし此の理、如何ん。師云く、道うを見ずや。累劫に飢寒を受く、と。僧云く、只だ古人、飯を喫せずと云うが如きは、豈に是れ有るを知らざるの謗にあらざらんや。師云く、有るを知らざるの謗を論ずる無し。直得たとい是れ有るを知るも、肯ぜざれば亦た是れ謗なり。

乃ち僧に問う、汝、還た有るを知らざるの謗を会すや。豈に見ずや、古人、座主を見る。乃ち座主を喚びて云く、是れ汝、身中に佛有り、棄還た識るや。座主對えて云う、何處にか与麼の導屎放尿する佛を得ん。這個は是れ有るを知らざるの謗なり。

大凡、出言吐氣は和泥合水し去るべからず。夫れ人の与めに師匠と為るは豈に是れ草々の流ならんや。

だいたいものを言つ場合には、べとべとの泥まみれになつてはいけない。人の師となる者がいいかげんなことであつてよいものか。

・和泥合水 方便をめぐらして人の為をはかることをいう。

且く一種の本自真如を説くは蝗降に同じきに非ず。修證を仮らず、何んぞ劬勞を藉らんや。衆聖興るも加えず、千人退く時も滅原作滅じ難し。既に其の事を導びかんには、須く其の人に頼るべし。若し通明ならざれば焉んぞ如理を知らんや。然らば則ち二者既に達するも、表裏未だ亡びず。有法の牽く所に滞り、無為の束ぬる所に遭わば則ち須く其の能所を混ぜずべし。妄慮俱に銷すれば豁として虚空の如し。悠然として寄するところ無くして始めて功成り徳立ち、位は本情に稱うを得ん。果既に將に成らんとし、大事圓辦して始めて位を兜率に記し、獨尊たりて群品に超えたるを得ん。亦た樹果の如くに一般たりて方めて稱断と為す。此れを守りて解と為さば煖躁將凌、脱病不粘、謂いて無辯と云う。

一色の義已に立たば雙分の理須く知るべし。所以に劉陽云く、一色の後如何ん。答えて云く、有る人は長に歡喜し、有る人は嗔迫迫地なり。亦た艶潭の如きは云く、猫児の口裏に雀兒飛ぶ、須らく此の一格にして始めて得べし。餘は則ち論ずべからず。

一色の義が明らかになったならば雙分の理を知らなければならぬ。だから劉陽が問う、一色の義を悟った後はどうなのか。ある人が答えて云う、ある人はいつもニコニコしており、ある人はカッカツと怒っている。また艶潭などは、猫の口裏に雀が飛んでいる、と答えているが、このような境界であつてこそいいのだ。その他は論ずる必要もない。

- ・千人退時難滅 上句に合わせて「難滅」とする。「衆聖興・・難滅」については不増不減經(大正十六卷)を参照。
- ・亦如樹菓云々 このあたりよくわからない。
- ・劉陽 道吾のこと。この問答の出典はわからない。
- ・此一格、艶潭の答えの内容を指す。

因みに挙す、南泉云く、祖佛は有ることを知らず、狸奴白纂却つて有ることを知る、と。諸人盡く知れり、諸方道出せる語句皆な行わるることを。且く如今禾山諸人に問わん、作摩生か是れ狸奴白纂。時に僧有り、出で來つて對えて云く、飢うれば則ち草を喫し、渴けば則ち水を飲む。師云く、道うことは則ち亦た多くを較せず。但だ両学を却くれば則ち行つ可し。豈に聞かずや、古人整理すらく、洞山、興平に礼す。興平云く、老朽に礼すること莫れ。洞山云く、老朽に非ざるに礼す。興平云く、他は礼を受けず。洞山云く、亦た止むることを要せず。此の一句錯れり。古人云く、當時洞山對えて云く、亦た曾て止めずと。

・諸人盡知以下 この南泉の語について諸方の禪客がいろいろに拈弄した語句が世に行われていることは周知の通りだ。諸方の道出の例は『抛居士語録』(禪の語録7)一〇八頁以下に詳かである。

・不較多 原文は不教多、そつたいして隔たつていない。すなわち僧の答えは、ぴたりとしたところとそつたいした距離はないというのが一句の意味である。教は較に立通。

・但却両学則可行矣 両字をけずつたならば他所にもち出してもよいであろう。両字はどれとどれを指すか。飢渴の二字が衆目の集まるところである。

・古人整理 古人のテキスト・クリティクを挙げたものである。亦不要止というのは錯りで、亦不曾止が正しいというのである。前者の場合だと非老朽は礼を受けないにしても、礼をしている者をとどめよつとは思わない、ということになり、後者の場合だと、かつてとどめたことはない(勿論今も)ということになる。たいしたへだたりがあるわけではないが、「可行」なのは後者だという禾山の意なのであろう。

看よ、一般の古人拈起すれば便ち縊素有り。只だ与摩に籠罩著すること莫かれ。争かでか得ん。所以に微細中に更に須らく子細にして始めて得べし。

・看 原文は看謂となつている。どちらか一字あればよいわけであるが、とりあえず先にある字を残しておく。

・一般古人云々 右に示した例のように、古人の拈弄の仕方においては、白黒の弁別がちゃんとある。そうでないのが籠罩、がさつとり込む、がばつとかぶせる、である。

・争得 舌足らずな言い方、あるいは下に脱文があるのであろうか。

・微細中云々 微細の中でさらにこまかく見てとらねばならない。

夫れ教道なるものは太だ容易ならず。个个須らく主宰たることを解くして始めて得べし。見よ、向前の老宿、徒に示して云く、夫れ沙門なる者は十二時中一時も失つことを得ず、一時も背くことを得ず、と。上上の者は一撥して便ち去く。中下の者は功勲に落在す。直に須らく日夜勤苦し、心識を乾却して線道無からしむべし。直得^たい他に似るも猶お是れ借句。僧乃ち問つ、如何なるか是れ借句。師云く、金牌上に名無し、直に須らく佛未出世の時に向かつて躰會取すべし。

おしえみちびくということは簡単なことではない。一人一人が主宰となりえてはじめて充全と云える。むかしの老宿が修行者に示しておられる、沙門というものは十二時中一時も失ってはならないし、一時も背いてはならない、と。上上根の者ならば一はじ

きでとびだして行くであろうが、中下根の者は功勳という次元に落ち入ったままである。日夜勤苦し、心識を干しあげて糸ひとすじのちがいないようにしなければならぬ。そうしてたといそれとそっくりになってもなお借りものの句だ。そこで僧が問う、なにが借りものの句ですか。師が云う、合格発表に名がない、仏未出世の時点において体得せねばならない。

・ 向前老宿 誰であるか不明。

・ 十二時中 本巻荷玉和尚の伝に、「問、十二時中如何与道相應。師云、莫造作云々」という問答がある（一六頁）。今言うところの不得失、不得背の対象として、「道」を置いてもよいであろう。

・ 一撥便去 丹霞和尚の伝に「眞師子兒一撥便轉」とある（一五九）。その当体にぶつかって行く。

僧問う、出世して出でざる時如何ん。師云く、与摩に來りて皆な到らず。僧曰く、未審し、還た出世するや。師云く、諸聖更に事有。僧曰く、只だ仏の出世するが如きは什摩人の為なるや。師云く、未だ攸せざる者の為なり。僧曰く、未審し、佛は什摩の處に向かつて出世するや。師云く、進身の人は得難く、猛利の人は得難し。進んで曰く、如何なるか是れ進身の事。師云く、事事惣じて打過すべし。進んで曰く、事事惣じて須く打過すべき時如何ん。師云く、他解かれく傳語す。進んで曰く、未審し、什摩人の語を傳つるや。師云く、他囑を受けて他聞を得ず。僧曰く、和尚は学人をして承當せしむ、又た如何んが承當せん。師云く、直に須く目前に似るべし。僧曰く、承當せし後如何ん。師云く、今日有るを知らず。

僧が問う、出世して世に出ないということはどういうことですか。師が云う、そのように来たものは皆到達していない。僧が云う、それでも出世はしたのですか。師が云う、諸聖には別に仔細があつてのことだ。僧が云う、佛の出世ということですが、誰のためのですか。師が云う、未攸の者のためだ。僧が云う、佛はどこに出世されるのですか。師が云う、進身の者は得がたく、猛利の者は得がたい。進んで云う、進身とはどういふことですか。師が云う、事々かたをつけなければならぬ。進んで云う、事々すべてかたをつけねばならない時どうですか。師が云う、かれはつたえることができる。進んでいふ、誰のことばをつたえるので

すか。師が云う、他のことづけは受けても他から聞くことはあり得ない。僧が云う、和尚さんわたしに承当させようとしていらっしやるのですが、どう承当したものでしょう。師が云う、目前のもののようにでなければならぬ。僧が云う、承当したあととはどうですか。師が云う、今日が有ったことも意識しなくなる。

・ 出世不出時如何 一心上のように訳しておいたが、出世不出は出世不出世の略された形かもしれない。
・ 為未攸者 攸とは、自らをそこへ推し出すこと。積極的に我が任として当ること。

・ 進身 自らの境位を進める。仏は進身の者、猛利の者のところに出世するというのが師の答えの意。

・ 打過 了却と同じ意。

・ 事事忽須打過時如何 忽須の二字をはずした方が師の答えには続きやすい。

・ 他解傳語以下 卷九、九峯和尚の伝に「問、九人与摩来有何音信 師云、九人不得意 曰、既不得意、又何傳語 師云、正是傳語。未審傳什摩人語。師云、寧當截舌、不犯國諱」とあるのを参照。

・ 他聞 智度論卷二に「問曰、若諸佛一切智人、自然無師、不隨他教、不受他法、不用他道、不從他聞而說法。何以言如是 我聞。答曰、如汝所言、佛一切智人、自然無師、不應從他聞法云々」とあるのから見て、他より聞くことと読むことも可能である。

・ 承当 ガチツと受けとめて自分のものとする。

・ 直須似目前 即今そのままでなければならぬ。

・ 不知有今日 自己の今日も消えてしまふ。目前に似るといふ承当の仕方が完成した段階では。

問う、如何なるか是れ古佛心。師云く、世界崩陥す。僧曰く、世界什摩としてか崩陥するや。師云く、寧んぞ我が身無からんや。

問う、古佛心とはどのようなものですか。師が云う、世界が崩陥する。僧が云う、世界は何故崩陥するのですか。師が云う、こ

のわれというものがあるではないか。

- ・世界崩陥によって古佛心が析出される。

問う、仰山、鎌を挿す、意作摩生。師云く、汝、我を問え。玄沙鎌を檜倒す、意作摩生。師云く、我、汝を問う。

- ・挿鎌 すきぐわを地につきさす。この話については伝灯録十一仰山の伝参照。玄沙のことも割注に引用してある。

- ・汝問我 仰山ではなく、このわしについて問え。

- ・我問汝 玄沙ではなく、お前自身の意はどうなのだ。

問う、咫尺の間、什摩と為てか師顔を覩ざる。師云く、且く閻梨が与たまに一半を通せん。僧曰く、什摩としてか全く通ぜざる。師云く、法を盡くさば則ち民無からん。僧曰く、民無きことを怕れず。請う師、法を盡くせ。師云く、次いで禾山に到る。

- ・咫尺の間云々 石霜の伝中、二七六頁参照。

- ・盡法則無民 三 八五、九五、一〇二頁等参照。

・次到禾山 伝灯録ではこの語の代わりに「為知己喪身」となっており、次下はこのテキストの次の問答と等しい。伝灯録でもうまくつながらない。どちらにせよテキストに問題がある。

問う、如何なるか是れ佛法の大意。師云く、己を知る者の為に喪身す。僧曰う、什摩と為てか却つて喪身す。師云く、好心、好報無し。

問う、仏法の大意とは何ですか。師が云う、己を知る者の為に喪身す。僧が云う、どうして喪身することになるのですか。師が云う、善意に好い報いはない。

・為知己者喪身 史記刺客列伝「士為知己者死、女為説己者容」。ここでは、仏法を求める者は仏の為に身を喪ぼすことにもなるというほどのことであろうか。

・好心無好報 質問者の仏法に対する甘ったれた気分を突き放した。三 一 一四頁にも見える。

問う、尊者撥眉撃目して育王に示す時如何ん。師云く、即今也たと与摩なり。僧云く、学人如何んが領会せん。師云く、摩利支山に非ざる莫し。

問う、尊者が育王に眼を据えて注視してみせた時、その意はどういうことでしょうか。師が云う、今だってそんなだ。僧が云う、私はどのように受けとめたらよいのでしょうか。師が云う、どこだって摩利支山だ。

・この話の出典不明。

・即今也与摩 わしとあんたと今、問答しているのこそ尊者と育王との出会いなのだ。

・摩利支山 不明。育王と尊者が出会った場所として設定されていたのであるうか。

問う、学人時中に境縁を息盡す。未審し、當た何れの處にか歸せん。師云く、落葉、地に旋り(却至)始めて休むを知る。僧曰く、只だ地に旋って休むを知るが如きは、復た何んの話論ありや。師云く、截舌の刀あるも、活人の劔無し。

問う、私は十二時中、外のものに依る立場をとりません。どういうところに落ちつくことになるでしょうか。師が云う、落葉が地上でヒラヒラしてやっとおしまいということがわかる。僧が云う、地上でヒラヒラしてやっとおしまい、ということに何か言つとところがありますか。師が云う、(わしには)舌を切る刀はあるが人を活かす劔は無い。

・落葉旋於地云々 原文は「落葉旋於地、却至始知休み」であるが、「却至」の二字はこの文脈の中では落ちつかない。

・有截舌之刀 相手を切つてすてた言い方。

問う、見るも而も見ず、聞くも而も聞かざる時如何ん。師云く、既に國師を曉らむれば、須く洞山を明らむべし。

問う、見て見ない、聞いて聞かない時はどうでしょうか。師が云う、慧忠國師がわかったならば、洞山を明らかにせねばならん。

・既暁國師 慧忠國師の無情説法の話。

問う、雪中(原作仲久思、什摩と為てか相見して辞無きや。師云く、道は且く目撃に憑まがさん、知音は復た是れ誰ぞ。僧曰う、鐘期に韻有る時、又た作摩生。師云く、只だ伯牙の琴を愛し、文侯の志を續がず。

問う、雪なかで久思して相見した時にどうして言葉がなかったのでしょうか。師が云う、道を物に見てとることはまあおまえさんに任しておこう。(しかし)誰がおまえさんの知音なのか。僧が云う、鐘子期の方にもともと音色のある場合はどうでしょうか。師が云う、伯牙の琴を愛するのみであって、文侯の志は続かない。

・雪中久思云々 慧可が達磨に相見した時のことを指す。ここでは暗に自分を指している。

・道且憑目撃 莊子田子方「子路曰、吾子欲見温伯雪子、久矣。見之而不言、何耶。仲尼曰、若夫人者、目撃而道存矣、亦不可以容聲」をふまえたもの。

問う、儒は洗耳を以て良と為す。釋は何を以て極則と為すや。云く、榮枯の琴を厭わず、瓢提、誰の為にせんと欲するや。僧曰う、世を避くるを争奈何せん。師云く、巢父の意そむに別かず、由お許氏の能を忻ぶ。

・瓢提 不詳。

問う、居士不二の門、如何んが理論せば則ち後学の疑いを息めん。師云く、乾時に須く好く去るべし。雨霖頭を待つこと莫かれ。僧

曰く、学人は寧ろ雨霖頭を待たん。未審し、師の意如何ん。師云く、青山は秀色に憑る。水の碧たるは波瀾を仮る。

問う、維摩居士の不二法門は、後学の疑念を解くために、どのように論定されますか。師が云う、晴れている時にさっさと行くことだ。雨が降ってびしょ濡れになるのを待っていてはいけない。僧が云う、私は寧ろ雨が降ってびしょ濡れになるのを待ちましよう。和尚さんはどういうおつもりですか。師が云う、青山の青はその色に依っている。波瀾があつてこそ水は碧水になるのだ。

・ 乾時云々 乾時はからりとして疑いのない時、待雨霖頭は疑いがあることを指す。師の答えは、疑いがなければそれでよい、やたらと疑いを起こすいわれはない、ということ。

・ 学人寧待雨霖頭 僧の答えは、私はむしろ疑いを抱こうということ。

・ 青山憑秀色、水碧波瀾 此の二句はまとまりが悪い。一応、青山を禾山に、質問僧を波瀾をたてようとする者に比定しておく。

問う、無影の言、如何んが話論せん。師云く、満口に吐尽し、已に知聞を具す。

問う、無影の言はどのように語つたらよいのでしょうか。師が云う、あらいざらいしゃべつたから、もつ知れわたつてしまった。

・ 無影之言 師(慧忠國師)以化縁將畢、涅槃時至、乃辞代宗。代宗曰、師滅度後、弟子將何所記。師曰、告檀越、造取一所無縫塔。曰、就師請取塔樣。師良久。曰、会麼。曰、不会。師曰、貧道去後、有侍者應真却知此事。・ 代宗後詔應真人内、拳問前語。眞良久曰、聖上会麼。曰、不会。眞述偈曰、湘之南、潭之北、中有黄金充一國。無影樹下合同船、瑠璃殿上無知識「伝灯録五、の話を指すのであろう。

問う、身命を惜しまざる底の人、當た何事をか求むる。師云く、捨命せば無命ならんとす。希い無くして希う所有り。云く、既に捨命す、什摩と為てか却つて無命なりや。師云く、絶息して来往なし、寧んぞ道の已に行わるるを知らんや。

問う、身命を投げ出す覚悟の人はそれによって何を求めるのでしょうか。師が答えて云う、命を捨てたら命がなくなるであろう。求めることが無いところに求めるものがあるのだ。僧が云う、もう命を捨てている人がまた命が無くなるとはどういうことですか。師が云う、息が絶えてしまったらどうしてそこに道が現前しているのがわかるうか。

・捨命將無命 僧が勢いこんで質問したのを揶揄する気持ちも含まれている。

・無希有所希 完全な無功德行を指す。

問う、大人相い逢えば則ち个の醜陋を道う。未審し、和尚相い逢わば、个の什摩をか道わん。師云く、未だ深拙を蔵すること有らず、言話すること又た何ぞ妨げん。僧曰く、妨げざるの事、乞う師方便せよ。師云く、當今の諱に觸れず、舌を断截するに因なし。

問う、大人は出会うときたないことを云います。和尚さんは出会ったら何をおっしゃいますか。師が云う、欠点を隠しているわけではないから、ものを言うことはかまわない。僧が云う、ではかまわないところで一言ご教示下さい。師が云う、今上陛下の諱に触れないのだから、舌を切られるわけがない。

・醜陋 卷二十六 一四三頁に「問、如何是納衣下事。師云、醜陋任君嫌、不掛雲霞色」とある。そこでは身体について云っているものようであるが、今の場合は何についてなのか判然としない。

・不觸當今云々 舌を切られる目におちいらせたいらしいが、そうは問屋がおろさん、といっているのであろう。

問う、初めて雪嶺に登るや正覚道成る。什摩と為てか雙林に方めて玉葉を傳つるや。師云く、明星の現ずる有ることを示し、枝條翠今に異なる。僧曰く、与摩ならば則ち枝枝絶たざり去るなり。師云く、尋苗は縦い路有るも、終に解く根に到るに非ず。

・初登雪嶺正覚道成 太子成道経に「雪山修道證菩提」とある。（敦煌變文二八七頁）。

・為什摩雙林云々 雙林は原文には霜林。雪山成道だけで十分であって、雙林涅槃というような道具立てなんか必要ではな

いではないですか。

・枝條異翠今 よく読めない。

・枝枝不絶去也 どの枝も永久に続くことになるはずだ。

問う、乗羊は漸次、駕牛は理窮、四衢に顧視す、此の人還た家業を紹ぎ得るや。師云く、三車もて火宅を出ずるも、露地當頭ならず。僧曰く、既に當頭ならず、誰か露地に當らん。師云く、未だ日程に跨ること有らず、終に須らく影跡を帯ぶべし。

・乗羊云々 法華経譬諭品にもとづく。漸次と理窮とが何を意味するかが今一つわからない。ともかく羊車、鹿車、牛車を四衢道中に探している子供達は長者の家業をつぎ得るか、という問意であろう。

・三車出火宅云々 三車を求めて火宅を出たけれども露地は目の前にはない。露地當頭であつてはじめて家業をつぎ得るといつことであるつ。

・未有跨日程云々 一日に行くべきところをいきつくしていないのだから、どうしても日暮れに己の影を引きずらなければならぬ。「誰當露地」などと問う僧の有様を云つたものであるつ。

問う、護明跡を降して唯我独尊、明星現わるる時又た成道と言つ。未審し、此の理如何ん。師云く、物の為めに權りに世に興る。争でか知らん、位に涉りて馳せんとは。僧曰く、位に涉り、世に興るは猶お是れ今時の方便、未審し、還た跡を降さざる者有りや。師云く、兜率に向かつて居せざれば、雙林變彩すること難かりしならん。

・護明 卷一(一)一〇頁に云う、「准因果經云、釈迦如来未成佛時、為大菩薩、名曰善慧、亦名忍辱。功行滿位、登補處、生兜率天、名曰聖善、亦曰護明」。

・涉位 五十二位を経ること。

- ・今時 俗諦というほどの意味か。世に興らず、位に涉らざるものありやという問の意であろう。
- ・師の答えは、不降跡の仏など問題にする資格はお前にはない。

問う、古人に言有り、擬心せば則ち差う、況や復た言有るをや、と。只だ擬せず、又復言無き時の如きは如何ん。師云く、芭蕉重剥の後、那んぞ知らんや自ら疑わず。僧云く、如何んが此の過を招くを免れん。師云く、日は東嶺より上り、月は西嶺に沈む。

問う、古人が言っております、それを目ざして求めようとすると、そのとたんに外れてしまう、まして言葉で表現しようとすればますます離れてしまう、と。求めず、またそれを言葉で表さない場合はどうでしょうか。師が云う、芭蕉の葉を次々と剥ぎとってしまったとき、あにはからんやもともと疑ってはいなかったのだ。僧が言う、そのようにできていない過を招くのをどついたらさけられるでしょうか。師が云う、日は東方の山より上り、月は西方の山に沈む。

- ・擬心則差、況復言有 僧筆、答劉遺民書「至理虚玄、擬心已差、況乃有言、恐所示轉遠」。
- ・自不疑 疑は質問の「擬心」「不擬」をうけたもの。恐らく南泉と趙州との問答「師問南泉、如何是道。泉云、平常心是道。師云、還可趣向不。泉云、擬即乖。師云、不擬、争知是道。泉云、道不属知不知。知是妄覺、不知是无記。若真達不疑之道、猶如太虚、廓然蕩豁。豈可強是非也。師於言下、頓悟玄旨、心如朗月」(趙州録)を意識しているであろう。
- ・過 直前の師の答えによって指摘された僧の残りかす。
- ・日従東嶺上 「自不疑」のところを指し示したもの。

問う、古人云えらく、盲聾梵炯【梵炯101】、此の人須く救うべし。若し救わずんば佛法に靈驗無し、と。未審し、此の人は如何んが救わん。師云く、奇特の意有りと雖も、還た須く反つて自ら招くべし。学人は則ち甘んじて招かん。未審し、和尚又た如何ん。師云く、山に登りては水脉を知り、室に入りては温床に坐す。

問う、盲と聾と梵炯【梵炯1001】と、この三様の人をこそ救わなければならない。もし救うことができないならば仏法には靈験が無いことになる、と古人は言っています。このような人をどのようにして救いましょうか。師が云う、病める人を救おうという奇特な気持ちがあったとしても、まずその病を自分の身にひきつけてみなくてはならない。(僧が云う)私は喜んでそうなりましょう。さて和尚さんはどのようにして救って下さいませうか。師が云う、山に登ればちゃんと水脈のあるところがわかり、室に入ればちゃんと温かいところに坐る。

・盲聾梵炯【梵炯1001】 玄沙の三種病人を指す。碧巖録八十八則参照。

・登山知水脉云々 三種病人は普通の情識の世界に住していない。そこをとらえて三種病人の一切の情識を越えた自ずからなる高い境地を指し示したものであるうか。

問う、古人言有り、相い逢つて相い喚はんと欲するも、脉原作咏(脉として語る能わず、と。未審し、還た相い喚ふや。師云く、古人の機に似却せば、還つて舌頭備わるに同じ。僧曰う、与摩原文になし)なれば則ち学人、無端にし去るなり。師曰く、但だ泥を踏むことなかれ。何んぞ洗脚を煩わさん。

問う、めぐりあつて語りかけようと思うのだが、胸がいっぱいで言葉にならない、と古人は言っています。和尚さんはどのように語りかけられますか。師が云う、古人の機とそっくり同じになりきってしまいさえすれば、ちゃんと舌はある。僧が云う、それでは私がいわれないことをしたことになります。師が云う、泥を踏みさえしなければよい。踏みもしないのに、脚を洗うというよいなことをするまでもない。

・相逢欲相喚云々 卷八雲居和尚の伝「問、相逢欲相識、脉脉不能言時如何。師云、適来顔【感104】道得自餘玄要、此不盡彰」。

・但莫踏泥云々 あくまでも語つて欲しいと思つている僧をつっぱねた答え。

寶峯和尚、九峯に嗣ぐ。洪州に在り、師、号は延茂、泉州仙遊縣の人なり。姓は郭、三會寺に出家し、依年具戒す。更に尋經討論せず。便ち祖門を慕いて九峯に参見す。

後ち因みに一日、非時に問う、觀瞻【時105】し將ち来るに全く所有無き時如何ん。九峯云く、此の事を知らんと欲すれば、此の事は(原文になし)風の如し。師乃ち頓に疑情を息む。更に他遊無し。

その後、ある日、決められた質問の時でないのに問うた、ずっとそれを見続けて来ているのですが、ぜんぜんそこには何も無いような時はどうでしょうか。九峯が云う、わかりたいならこの事は風のようなものだ。師はそこで頓に悟り、他所へ行くことがなかった。

・ 来欲知此事 来の字をはぶく。

壬辰の歳に寶峯に住す。

師、纔かに昇堂するや、衆集まれり。時に僧ありて問う、大衆雲集す。未審し、師に何んの賞賚有りや。師云く、龐弱を嫌わざれ。僧曰く、便ち請う。師云く、什摩處に去来すや。

師が上堂するや否や、大衆が集まった。その時にある僧が問う、大衆が集まっております。和尚さんは何を下さいますか。師が云う、粗末なのですが。僧が云う、どうぞお願いします。師が云う、どこに行っていたのか。

・ 什摩處去来 「不嫌龐弱」と言ってもう与えたのに、おまえさん何を言っているのか。

問う、如何なるか是れ古佛の心。師云く、終に土木瓦礫是れなりとは道わず。

問う、古佛の心とはどんなものですか。師が云う、決して土木瓦礫がそうであるとは云わない。

問う、大衆雲衆す。従上の宗乗、請う師拳唱せよ。師曰く、拳唱せず。僧云く、什摩と為てか拳唱せざる。師云く、國の為に賢を惜しむ。

問う、大衆が集まっています。どうか従上の宗乗を拳唱して下さい。師が云う、拳唱しない。僧が云う、どうして拳唱なさらないのですか。師が云う、国家のために賢人を大事にするからだ。

・為國惜賢 やたらと賢人を引き出さない。それが国家のためである。

問う、如何なるか是れ佛。師云く、頭には中膏の月を戴き、足は一蓮花を歩む。他の圓成かれの處を看んよりは、自ら歸家するに如かず。

問う、佛とは何ですか。師が云う、中膏の月を戴いて、蓮花の花の上を歩んでいる。(しかし)佛の圓成の迹を追うよりも、自らその本分のところに帰えることが大切だ。

光睦和尚、九峯に嗣ぐ。都闕に在り。師は行修と号す、福州福唐縣の人なり。姓は林、瑞巖山に出家し、依年具戒す。便ち 恥越を離れて九峯に造る。峯、纔に師を見て便ち問う、近ごろ什摩の處を離れしや。対えて云く、亦た未だ和尚が此間に到らず。峯云く、若し是れ諸方ならば則ち二十杖有らん。師云く、和尚が放過せるを謝す。峯、之を叱して云く、参衆し去れ。師云く、梭。此れ従り契會し、心源を郭浄す。殊方に遍歴して泉石に縁るに任す。

・都闕 南唐の首都金陵を指すのかもしれない。

・近離什摩處 どこから来たかというのは、光睦の在り方をためそうとするもの。これに対し、ですがまだ和尚さんのとこ

るに着いておりません、という師の答えは、逆に九峯をためそうとしている。和尚の在り方をこれから拝見させて貰おうというところがある。それに対して九峯が、よそなら二十棒だぞと云ったのは負けおしみであり、大変に師をみとめた云い方である。

・ 参衆去 大衆に加われ。

初め請うて南源に住せしむ。時に人有つて問う、如何なるか是れ和尚未上の一句字。師云く、如今什摩をか覓むる。進んで曰く、与摩ならば則ち学人脚短にし去らん。師云く、猶お亞次の問を成す。

・ 一句字 一句子の誤写か。

・ 如今覓什摩 如今は未上とコントラストをなす。未上の一句を問うのは師に何かを求めているのであるが、今お前が何を求めているのかを云つて呉れたら未上の一句を云つてやるう、という意が裏にある。

・ 脚短 よくわからない言葉だが、世説新語賢媛編に「撩玉臺常因人、脚短三寸、當復能作賊不」という語がある。

師、一たび南源に棲みてより已に二紀を逾ゆ。辛亥の歳に於いて、皇帝遐かに紫詔を飛ばし、徴して京都に赴かしめ、慧観禅師を賜う。

同安和尚、九峯に嗣ぐ、洪州建昌に在り。師は常察と号す、福州長溪縣の人なり。姓は彭、依年具戒し、便ち恥越を離れて九峯に参見す。密に玄関に契いて鳳嶺に棲む。

僧問う、如何なるか是れ鳳嶺の境地。師云く、閩梨則今什摩の處に在りや。

僧が問う、どんなのが鳳嶺の境地ですか。師が云う、君は今どこにいるのだ。

問う、如何なるか是れ従上来の事。師云く、従上提不起。僧曰く、今日の方便又た如何ん。師云く、万人吐不出。

問う、どのようなのが従上来の事ですか。師が云う、従来だれも云い出し得ていない。僧が云う、では今日の方はいかがですか。師が云う、万人が吐露し得ない。

・ 従来たれも云い得なかつたことだが、今、和尚さんはどのように示してくださいますか、と和尚の方便を問うているのに、万人と一般化してこたえているのは少し気になる。

艶潭和尚、九峯に嗣ぐ、洪州建昌に在り。師、匡悟と号す、泉州仙遊縣の人なり。保福院に於いて出家し、依年受戒す。九峯の密旨に契いてより、性に任せて逍遙す。辛亥の歳に於いて、請つて艶潭に住せしむ。

問う、香煙地を喊り、大いに法筵を展ぶ。従上の宗乘如何にしてか拳唱せん。師云く、錯つて人に拳似すること莫れ。僧曰く、与摩ならば則ち一應に是くの如くにし去らん。師云く、還た是れ勿交渉。

問う、香氣が一面に立ちこめ、大いに法筵を展べております。従上の宗乘をどのようにとなえられますか。師が云う、まちがつても人に示すな。僧が云う、では一切そのようにして行きましよう。師が云う、それもだめだ。

・ 一心 一切、すべて。元来は名詞を修飾する語。

問う、六葉の芬芳、師は何葉をか傳うる。師云く、六葉相續がず、花開きて菓成らず。僧曰く、豈に今日の事無きや。師云く、若し是れ今日ならば則ち有り。僧曰く、今日の事如何ん。師云く、葉葉連枝に秀で、花開きて處處に榮う。

・前段の問答とともに、艷潭に初めて住したときの多少儀礼的な問答かと思われる。

後の雲盖和尚、先の雲盖に嗣ぐ、潭州に在り。師、景禅と号す。泉州仙遊縣の人なり。姓は田、祥雲山に於いて出家し、依年具戒す。便ち恥越を離れて蕭湘おせむに湊き、雲盖の真機に契えり。楚王欽敬し、紫を賜い超法大師と號す。

・契雲盖之真機 楚王之欽敬、と原文にあるが、後の之の字は衍字とすべきであろう。

僧問う、如何なるか是れ和尚の家風。師云く、四海曾つて通ぜず。

僧が問う、どのようなのが和尚の家風ですか。師が云う、かつて天下に伝わったことがない。

・四海不曾通 四海がお互いに断絶している。それが家風。

問う、古人言有り、一塵法界を含む、と。如何なるか是れ一塵法界を含む。師云く、通身躰圓ならず。如何なるか是れ九世刹那の分。師云く、繁りに興るも布彩せず。

・古人の言は「一塵含法界、九世刹那分」というのであろうが、古人が誰であるかは不明(三五八頁にも既出)。

問う、如何なるか是れ宗門的の意。師云く、万里の胡僧、波瀾に入らず。

・師の答えは、達磨はかつて海を渡って東土に来たことはないの意。

黄龍和尚、玄泉に嗣ぐ、號州に在り。師、諱は誨機、姓は張、清河の人なり。師便ち江夏に棲みて徒を匡す。吳朝欽敬して超慧大師を賜う。

師、時有つて、衆に謂いて云く、一句子有り、山の如く岳の如し。一句子有り、透網の魚の如し。一句子有り、百川の水の如し。為當^{はた}是れ一句なりや、為當是れ三句なりや。人有つて拈じて福先に問う、古人言有り、一句有り、山の如く岳の如し。一句子有り、透網の魚の如し。一句子有り、百川の水の如し、と。如何なるか是れ山の如く岳の如き底の句。福先云く、凡聖近不得。如何なるか是れ透網魚底の句。先云く、汝肯わずして又た争でか得ん。如何なるか是れ百川の水の如き底の句。先云く、互用千差あり。如何なるか是れ和尚の一句。先云く、錯つて拳似すること莫れ。

・ 號州 號の字は何かの誤り。伝灯録は鄂州とする。

・ 福先 祖堂集の序を書いた人。

・ 如山如岳底句 そば立つて何人も近づけない句。

・ 透網魚底句 どのような範疇にもはまらない句。師の答えは、うけがわないでどうしてよかるつ、うけがわなない人のあることを許さない句だ、承当せよ、という意。

・ 互用千差 用い方によって色々に異なる。

師、香嚴に問う、如何なるか是れ無表戒。嚴云く、閻梨が還俗するを待ちて則ち汝が為めに説かん。

・ 香嚴 智閑。この問答は香嚴の伝に出ている。

・ 無表戒 受戒の時に受者の身内に一種の防非止惡の功用ある実物を生ずるを無表戒と云ふ(織田仏教大辞典)。

・ 待閻梨云々 もう一度出家し直せということ。

師、又の時に云く、諸の和尚子、君主の劔あり、烈士の刀あり。若し是れ君王の劔ならば万類を傷わず。烈士の刀ならば釘を斬り

鐵を截つ。用は則ち無からざるも佩著するを得ず。什摩の爲めの故ぞ。忠言截舌の利刀を避けず、則ち血梵天に濺げばなり。久立珍重。時に人有つて問う、如何なるか是れ君王の劔。師云く、万類を傷わず。学云く、佩ぶる者如何ん。師云く、血梵天に濺ぐ。学云く、大いに好し、万類を傷わざること。師、打つこと二十棒。

・用則不無、不得佩着 烈士の劔と同様、君王の劔にも斬釘截鉄の用はあるけれども、身に佩びることは許されない。何故かと云えば、君王に対する忠言の士は、截舌の利刀を避けないので、たちまち血の雨が降ることになるからである。血濺梵天という表現の典拠を今探り得ない。

・佩者如何 学人の質問のポイント。

・大好不傷万類 大変結構な不傷万類です。

問つ、明鏡臺に當る、還た物を鑿すや。師云く、物を鑿さず。僧云く、忽然胡漢來る時作摩生。師云く、胡漢俱に現ず。大いに好し、物を鑿さざること。師便ち之を打つ。

問つ、鏡が台に据えつけてあります。物をうつすでしょうか。師が云つ、物をうつさない。僧が云つ、もし胡人と漢人とがやつて来たらどうなりますか。胡人漢人とも鏡の中にあらわれる。僧が云つ、大変結構な物をうつさないです。師はそこで僧を打つ。

・問答の型は前段と同じである。

問つ、如何なるか是れ寶更。師云く、無一物。如何なるか是れ更中の寶。師云く、寫ぎ出さず。学云く、大いに好し、無一物なること。師便ち之を打つ。

問つ、宝更とは何ですか。師云く、中に一物もない。僧が云つ、更中の寶とは何ですか。師が云つ、出しようがない。僧が云つ、大変結構な無一物です。そこで師は僧を打つ。

・これも問答の型としては前段、前前段に同じ。

・寶更 舍利などをいれる器。

問う、如何なるか是れ大疑底の人。師云く、対坐の盤中、弓臺に落つ。如何なるか是れ大不疑底の人。師云く、再坐の盤中、弓臺に落つ。

・対坐盤中弓落臺 対座して酒盛りの最中、弓の影が杯に落ちる。風俗通義卷九、世間多有見怪驚怖以自傷者の條に次のような話がある。杜宣という役人が新任の県令にまみえ酒を賜った時、壁にかけてあつた赤弩の影が杯の中に落ち、蛇のよつに見えた。杜宣は仕方なしに飲んだが、その日のうちに病気になり、なにもできなくなつた。たまたま用事で杜宣の家をおとつれた県令がその原因を訊ねると、蛇が腹の中に入ったためだということであつた。県令には思い当たることがあつた。そこで再び杜宣を招き酒を設けたところ、また杯の中に蛇の影があつた。こんどは県令はそれは壁上の弓の影にすぎないことを云つてやつた。すると杜宣の病はたちまちに癒え、のち大いに出世したという。

・再坐盤中弓落臺 弓だとわかつてやれやれと飲み直しているところ。

問う、如何なるか是れ西来意。師曰く、波欺の人、手巾を失せり。

・波欺人 達磨をさす。失手巾はよくわからないが、梵網經卷下に「若佛子(中略)常用楊枝澡豆三衣瓶鉢坐具錫杖香爐漉水囊手巾刀子火燧鑷子繩牀絰律佛像菩薩形像、而菩薩行頭陀時及遊方時、行來百里千里、此十八種物常隨其身」とあるのを考えれば、達磨は手巾を失くしたので中国に來れなかつた。つまり達磨西來せずということになるのであろう。

龍光和尚、羅山に嗣ぐ、金陵に在り。師、隱微と号す。吉州新淦縣の人なり。姓は楊、年八歳にして石頭院に於いて出家す。十六

にして洪州大安寺に於いて具戒す。十七にして便ち祖筵を慕いて恥に入る。

初めて羅山に参見するや、羅山纔かに師を見て器異し、乃ち問う、汝は是れ什摩の處の人ぞ。对えて云く、江外の人なり。羅山云く、争でか這裏に到るを得ん。師云く、婢婢。羅山之を叱す。師便ち瓶囊を掛け、盤泊すること數載。

・婢婢 ヤヤあるいはタタと発音するものらしい。よくもまあやって来れたものだ。と羅山が云ったので、尋常でないおどろき声を立てて見せたのであろう。

後ち因みに一日辞する次いで、羅山、師の身上より納衣を脱下し、繩牀に披向して坐して云く、若し去らんと要すれば納衣を取得せよ。汝を放して去らしめん。師、東邊よりして堂中に向かつて礼三拜し、西邊より進前して云く、和尚に就いて納衣を請う。羅山忻然として脱し、師に還す。師、接待し、礼謝して出づ。羅山遂に師を把駐して云く、却来すること一轉せよ。師云く、遠く和尚に辞違せざれば則ち来らん。此れ従より契會し、豁池として疑い無し。

・披向繩牀 繩牀に師の納衣をかぶせたのであろう。

・師の仕草の意味するところ、即ち羅山が忻然とした所以がよくわからない。

次第に恥を離れ、諸方を遍歴す。初めて龍泉に住するや、辛亥の歳に於いて、勅旨もて徵詔し京に赴かしむ。龍光演法を賜い、仍りて覺寂禪師を賜う。

・賜龍光演法 龍光演法という扁額を賜うたのであろう。

大師上堂して云く、曠劫来の事只だ如今に在り。如今の事は作摩生。試みに个の消息を通じ看よ。什摩の来由か有る。有りや、有

りや。諸の和尚子、這個の事、古今排不到、老胡吐き出ださず。祖師什摩をか道いし。還た人有つて祖師の与に主と作り得るや。時に人有つて纔かに礼拝するや、師便ち云く、玆重。

師が上堂して云う、曠劫来の事はまさしく今に在る。ならば今の事はどうであるか。誰かその消息を云つて見よ。どういつ来由があるか。云えるものが居るか、居るか。諸和尚、この事は古今しかるべく指定し得なかつた。達磨も云えなかつたし、祖師も何も云わなかつた。ではあるが誰か祖師方のために主となり得るものが居るか。時にある僧が居て礼拝したとたん、師が云つた、玆重。

・曠劫来事只在如今 成句と思われるが出典が解らない。

・与祖師作得主 祖師に対して主となつてその事を通してやる。

・師が最後に玆重と云つたのは、礼拝した僧を、主となつたものと認めたとようでもあるし、ぴしゃりと出鼻を抑えたようでもある。

問う、如何なるか是れ黄梅の一句。師云く、則今作摩生。如何にしてか通信せん。師云く、九江に路絶ゆ。

問う、何が弘忍和尚の根本義でしょうか。師が云う、お前さんの根本義はどうなのだ。僧が云う、通信の仕様があるのですか。師が云う、九江で路は絶えておる。

・九江路絶 卷二弘忍の伝によれば、六祖慧能を江辺に送り出したあと、三日たつても全く説法しなかつたという。そこで黄梅の一句は絶えたのである。従つて通信のしようがない。僧の答えをほめたことになる。

僧問う、國界安寧なるに什摩と為てか明珠現ぜざる。師云く、什摩の處にか落在する。

僧が問う、天下太平なのに、どうして明珠が現れないのでしょうか。師が云う、その明珠は今どこに落ちてゐるか。

問う、如何なるか是れ龍泉の劔。師云く、匣より出さず。進んで曰く、便ち請う。師云く、辰星度を失す。

問う、龍泉の劔とはどんなものですか。師が云う、わしは匣から出さん。進んで云う、そこを何とかして下さい。師が云う、星の運行が狂うぞ。

・龍泉劔 龍泉島の南に龍淵という所があり、そこは欧冶子が劔を鑄た處だという。師の住寺の龍泉の両方にかけている。

・辰星失度 漢書天文志に云う「古人有言曰、天下太平、五星循度、亡有逆行」。一たんはこから出したならば、天下に大乱を起こすことになる。お前の首なぞ眞先にぶつとぶぞ。

龍廻和尚、羅山に嗣ぐ、高安に在り。師、從盛と号す、福州恥縣の人なり。長生山に於いて出家し、纔かに尸羅を具するや、便ち祖道を尋ぬ。羅山に参見し頓に玄機に契う。恥を出でて龍廻に住す。

僧問う、梵王佛に請い、度して一切の衆生を盡くさしむ。尚書今日慇懃に接足し、師に拳唱せんことを請う。師云く、處處に大陽輝く。学云く、与摩なるは則ち全く今日に因る。師云く、礼せずして更に何の時を待つや。

・与摩則全因今日 處處に太陽が輝いているのは全く今日の佳き日のおかげでございます。

・不礼更待何時 いつまでもぼんやりと立っていてどうしようというのか。早々に引っこめい。開堂の時の儀礼的な問答。

師、招慶に到る。度上座問う、羅山尋常に道う、諸方は盡く是れ幕飯を喫す。唯だ羅山有りて是れ一味の白飯なるのみ、と。兄は羅山従り来たれり。却って手を展べて云く、白飯、嫡子を請う。師、手を擡起して打つこと両掴す。度上座云く、將に謂えり、是れ白飯と、元来也た只だ是れ幕飯。師云く、癡人、棒もて打つも死せず。

師は招慶山に行った。度上座問う、羅山和尚はいつも云っている、よそはみんなぞうすいだが、わしんところだけは純ぎんめし

だと。あなたは羅山から来られた。こんどは手をのべて云う、ぎんめしを少し下されよ。師は手を差し上げるとげんこつで二度相手の手をたたいた。すると度上座は云った、ぎんめしとばかり思っていたが、なんだやっぱり只だのぞつすいじゃないか。師が云う、おろか者めが、棒で打つても死なぬとは。

・幕飯といつのはどんなものか、よく解らない。

・最後の師云の師の字の上に師の字が重なっているが衍字と見なして取った。

度上座、夜間諸禪客に拳似する次いで、師、近前来して云く、不審。度上座云く、今日便ち是れ這个の上座挿を下せり。澁上座云く、挿を下することを用いず、但だ裏許に就いて一轉語を下取せよ。師云く、裏許に就いても也た道えり。度上座無對。師云く、是れ汝諸人、一時に縛して一束と作し、倒さまに不淨處に豎てたり。来晨相見えん。玆重。

度上座が、夜になって諸の修行僧達に昼間のできことを話しているとき、師が近づいて来て云った、やあ、どうも。度上座が云う、今日ほかでもないこの上座がげんこつくれたんだ。澁上座が云う、げんこつはいらん、ただここについて一轉語を下して見る。師が云う、ここについても云ったぞ。すると度上座はおしだまっている。師が云う、お前さまがた、一時にひくくって一束ねにし、不淨處にまつさかさまにおっ立ててやったぞ。朝までそうしておれ。あばよ。

師、因みに天台山に遊びし時、初めて紫凝に到る。衆僧一時に出でて接す。師、両手を以て杖子を握りて云く、國師の本位、什摩の處にか在る。僧対えて云く、上面の庵處便ち是れ。師云く、与摩に話話す、虚しく紫凝の飯を喫却せり。

師はたまたま天台山に行った時、初めて紫凝峯に登った。すると衆僧が一時に出迎えた。師は両手で杖を握って云う、天台大師がもともと居られたのはどこですか。僧がこたえて云う、上方の庵がそうです。師が云う、そんな話しぶりでは、無駄に紫凝の飯を喰らつてたのだろう。

・紫凝 天台山中の一峯。

問う、古人道わく、前三三、後三三、と、意作摩生。師云く、西山より日出で、東山に日没す。

・碧巖録三十五則参照。

問う、古人星に因りて得悟す、意作摩生。師、手を以て眉を撥開す。

問う、釈尊は明星を見て得悟されました、どういふことでしょうか。師は手で眉をつりあげるきつと見つめるしぐさ。

問う、丹霞木佛を焼く、意作摩生。師、火に向う。翠微羅漢を迎う、意作摩生。師、花を散ず。

・丹霞と翠微両和尚の伝参照。

師、羅山の少師に問う、先師に聲前の一句有り、汝還た解く挙げ得て全きや。僧、納衣の角を拈起す。師云く、汝も也た未だ夢に見てだにも真に礼せず。

師は羅山から来た少師に問う、羅山和尚に声前の一句がある。ところでお前さんそれを全部示せるか。僧は納衣のすみをつまみあげる。師が云う、お前さんも夢にも先師にお目にかかっているか。

・未夢見礼真在 在は句末の強辞。

師、遷化に臨みし時、上堂し、良久して云く、是れ什摩の時ぞ。諸上座、一百年中、只だ今日を看よ。今日の事作摩生。吾れ四十年來獨り此の山を鎮め、常に一劍を持して人天を活かす。師、却って手巾を拈起して云く、如今更に純陀の供有り、他方に提向して、

展看するに任す。便ち擲却す。僧有り問う、師は百年の後、什摩の處に向かつて去るや。師、一足を提起して云く、足下に看よ。師、侍者に問う、昔日靈山會上、釈迦牟尼佛は雙足を展開し、百寶光を放つ。師、却つて足を展べて云く、吾今放つこと多少ぞ。對えて云く、昔日は靈山、今日は和尚。師、手を以て撥眉して云く、辜負せざることを莫きや。

師は遷化にのぞみ、上堂してややあつて云つた、どういつ時だ。諸上座よ、人生百年の間、今日を問題とするのみだ。今日の事をどうするか。わしは四十年間ひとりこの山をおさめ常に一劍を持して人天を濟度して来た。こんどは手巾をつまみあげて云つた、いまここに純陀の供養がある、どこへでももって行って、好きなようにひろげて見てよろしい。そこで手巾をほつり投げる。僧が問う、師は百年の後どこに行かれるのですか。師は一足を差し出して云う、足下に看よ。師はこんどは侍者に問う、むかし靈山會上で釈迦牟尼佛は、両足をのべて百寶光を放たれた。そこで師は足をのべて云う、わしは今どれくらい光を放っているか。侍者がこたえて云う、むかしは釈尊、いまは和尚さんです。師は手で眉をつりあげて云う、釈迦牟尼佛に恥ずかしいのではなからうか。

・今日事作摩生 最後の決着のところをどうするか、どう死ぬか。

・純陀供 純陀は釈尊入滅に当たり最後の供養を捧げた。今は手巾をそれになぞらえ、入滅の確かな証しとする。

・百年後 死後をいう。

・足下看 行くところはちゃんとしまっている。

・昔日靈山會上云々以下 大般涅槃經後分卷下に、入滅におくられて来た迦葉のために「世尊大悲、即現二足千輻輪相、出於棺外、回示迦葉、從千輻輪放千光明、偏照十方一切世界」とあるのによつたのであるが、靈山會上の話しとしているのは奇怪である。

清平和尚、羅山に嗣ぐ、吉州に在り。師、諱は惟廣、福州恥清縣の人なり。姓は黃、禪林院に於いて出家し、年に依りて具戒す。而

して便ち羅山に参見す。密に玄関に契いて更に他往無し。尋いで恥嶺を離れて清平に住す。庚戌の歳、徵詔して京に赴かしめ、龍光を賜いて住止せしむ。號寂照禪師を賜う。

問う、如何なるか是れ第一句。師云く、頭を要すれば則ち斫り將ち去れ。

問う、第一句はどういうものですか。師が云う、首がほしけりゃ切ってもって行け。

・第一句 臨濟録に、「僧問、如何是第一句。師云、三要印開朱点側、未容擬議主賓分。問、如何是第一句。師云、妙解豈容

無著問、需和争負截流機。問、如何是第三句。師云、看取棚頭弄傀儡、抽牽都来裏有人」とあるのを参照。

・要頭則斫將來 絶对云わん、命をとられても。

問う、古今を歴せざるの事如何ん。師云く、什摩の處に落在するや。古今の事如何ん。師云く、乱りに道うこと莫れ。

問う、時間にかかわらない事はとうですか。師が云う、どこに落ちてているか。進んで問う、時間にかかわる事はとうですか。師が云う、みだりにもの云わぬことだ。

・落在什摩處 お前さんの中に落在しななくてどこに落在するのか。

・莫乱道 下らん質問はやめる。

中塔和尚、玄沙に嗣ぐ、福州に在り、師、諱は慧救、泉州卅田縣の人なり。龜洋山に出家し、年に依りて具戒す。便ち玄沙に遇い、密に心源に契う。更に他往無し。後ち耽王欽敬し、轉法輪を請うを以て、奏して紫衣を賜わしむ。

師、時有って上堂して云く、古今坦然、法池として是くの如し。与摩に道う、還た過有りや。人有って此の語を持して長慶に拏似

す。長慶云く、還た過無きを得んや。

・師の上堂の語は、恥王の太平の世を言祝ぐ儀式的な面もある。これに対する長慶の語は、こついつつかまえ方でよいだらうか、とかなり違和感をこめたものである。

問う、如何なるか是れ大撩嶺頭の事。師云く、料るに汝承當し得ず。学云く、重きこと多少ぞ。師云く、這般底は論劫奈何んともせず。

・大撩嶺頭事 五祖の衣鉢を継いだ六慧能が大撩嶺頭まで来たとき、慧明なる僧が衣鉢をとり戻すために追つて来る。「為衆人先、趁及慧能。慧能擲下衣鉢於石上云、此衣表信、可力争耶。能隱草莽中。慧明至提叉不動」という六祖壇經の故事を指す。

・這般底 大撩嶺頭の事。そついうものは永久にどうにもできないものだ。

師、了院主に問う、只だ先師の如きんば、盡十方世界真人躰と道えり。棄還た這今の僧堂を見るや。対えて云く、和尚眼花なること莫きや。師云く、与摩ならば則ち額を研りて先師を望むも、未だ夢にだも見ざらん。

師が了院主に問う、先師、玄沙和尚に「盡十方世界真人躰」という言葉がある。それでもお前さんにはこの僧堂が見えるか。答えて云う、和尚さん眼がちらついているのではないですか。師が云う、そんなことでは手をかざして先師を望んでも、夢にだつて会えやしないよ。

師、上堂して云く、我が此間。粥飯の因縁は、た縦然とい兄弟が為めに宗乘を拳唱するも、終に是れ恒ならず。如今省要を委せんと欲得ほせば、却つて是れ山河大地、汝諸人が与めに拳明し、其の事却つて常にして亦た能く究竟す。

・粥飯因縁 坐禅学道のこと。

・省要 かなめのところ。

・委 委悉に同じ。

又た云く、若し文殊の門より入らば則ち一切有為土木瓦礫、悉く皆な汝を助けて機を発せしむ。若し観音の門より入らば則ち一切善悪の音聲乃至蝦蟇も汝を助けて発明せしむ。若し普賢の門より入らば則ち動歩せずして則ち到る。我れ此の三處を以て汝に方便を示す。一隻筋を持して大海水を攪し、彼の魚龍をして水命なることを知らしむるが如し。還た會するや。若し智眼無くして之を審諦するは、任い汝百般に巧妙なるも究竟と為さず。

・伝灯録二十六卷温州瑞鹿寺本先禪師の伝に、「又云、天台教中説文殊観音普賢三門。文殊門者一切色、観音門者一切聲、普賢門者不動歩而到云々」とあるのによれば、天台教学中の一説にもとづくものと思われるが、今出処を明らかにし得ない。

・水命 水によつて生きていること。

問う、佛法の大意何の方便門よりして入るを得るや。師云く、入ることは是れ方便なり。

僧に問う、汝は豈に是れ展兄の少師ならずや。対えて云く、不敢。汝が和尚伊かれをして行脚せしむ。師便ち聲を失して云く、汝が和尚是れ什摩の心行ぞ。

・展兄 保福從展。

・汝和尚教伊行脚の一句、誰れの語とすべきなのか、どう前後とつづくのか解らない。

師、時有つて云く、滿眼に次れども見え、眼根昧し。万耳に聴けども聞こえず、耳根背く。二途曉らざれば只た是れ堺睡の漢。瞿日頌すらく、物を見ること明明にして見塵を絶し、聲を聞くこと浩浩として亦た因に非ず。宗師の直示には聞見無し、未だ曉らざれば徒に月の新たなるを見るを勞するのみ。

・見塵 見るはたらきの対象。

・非因 聞くはたらきの対象としての因があるのではない。

・曜日 いかなる人物が明らかではない。あるいは頌の名か。

因みに玄沙、白紙を封じて雪峯に送る。雪峯見て云く、君子は千里同風、と。其の僧却来して玄沙に拳似す。玄沙云く、与摩ならば則ち何ぞ猛春猶お寒しに異ならん。人有つて長慶に拳似す。長慶云く、送書底の人還た好悪を識るや。人有つて師に拳似す。師云く、送書し、書を呈し了る。退身せよ。

あるとき玄沙が白紙を封じて雪峯に送った。雪峯は見て云う、君子は千里へだてていても同じやり方だわい。使いの僧が帰ってきて、そのことを玄沙に話した。すると玄沙は云った、そんな返事ではこのわしは時候のアイサツをしたのと何のかわりもないではないか。ある人が以上の話を長慶にした。長慶は云う、こんな手紙くれたやつ、いったいものが解っているのだろうか。ある人が師に話した。師は云う、お手紙確かに見せてもらいました。退つてよろしい。

・長慶と師との話は、玄沙が雪峯に対して見せた不満を受けて、雪峯に代わつて玄沙の手紙を受け取つて見せたもの。

仙宗和尚、長慶に嗣ぐ、福州に在り、師、諱は棠禪。

師、因みに羅漢を見る次いで、問つ、古人言有り、寧ろ心の師と作るとも心を師とせじ、と。如何なるか是れ師。師、手を以て之

を指さす。

師があるとき羅漢の像を見ていたら僧が問うた、涅槃経に心の師とはなつても心を師としまいとあります。師とは何ですか。すると師は手で自分を指さした。

問う、学人常に昏沈に在り、請う師、驚覺せよ。師、杖を以て之を打ちて云く、若し痛痒を識せば則ち古佛と肩を齊しうす。

問う、わたくしはいつもくらく沈んでいます、どうかシヨックを与えてください。師は杖で僧を打つて云う、もし痛いと思つたら古佛とおなじだ。

師、因みに溪水を見て云く、此の水与摩に流れて急なることを得たり。僧云く、梭。師云く、還た脚手有りや。僧云く、有り。師云く、阿那个か是れ。僧手を以て之を指さす。師云く、用、時に應ぜず。僧却つて師に問う。師、水を以て之に噴す。

師はあるとき溪流を見て云つた、この水はよくもまあこんなに急に流れるものだ。僧が云う、はい。師が云う、手足があるか。僧が云う、あります。師が云う、どれがそれだ。僧は手で水を指さす。師が云う、そんなのでは咄嗟の間に合わぬぞ。そこで僧の方が師に問う。すると師は水を含んで僧にふきかけた。

・ 脚手 水をして与摩に急に流れさせているもの。

・ 用不應時 用は指さした働きとも取れる。そうすれば僧の働きをやつつけたことになる。

師、僧に問う、什摩の處を離るるや。对えて云く、浙中を離る。師云く、此間に来たりて幾年ぞ。对えて云く、和尚試みに道い看よ。師云く、汝豈に是れ今夏鼓山に在りしならずや。对えて云く、是れ冬か、是れ夏か。師別に云く、村僧を護せんには則ち得たり。

・ 是冬是夏 師の問いをはぐらかそうとするもの。

・ 謾村僧則得 田舎坊主をだまそうというのならそんな調子でよからう。どこいわしはだまされんぞ。別して云く、と別時の答えになつてゐるのが可怪しい。

師、僧に問う、汝平生什摩の業次を成得すや。对えて云く、已前は衆に在りて東拳西拳す。如今は業の成す可き無く、忽に般次無し。師云く、如今活業すること作摩生。僧の対え当らず。師代わつて云く、粥有るも飯無く、鹽有るも醋無し。

師が僧に問う、お前さん平生どんなことをしているか。こたえて云う、以前は大衆の中にあつてあれやこれややつておりましたが、今は成すべきことはありませんし、全く日課もありません。師が云う、では今はどう生きているのか。僧の答えは當を得ていなかった。そこで師が代わつて云う、粥はあるけれども飯はない、塩はあるけれども酢はない。

・ 無業可成惣無般次 無一物の境地を披瀝したのであるう。般次は班次の誤記と見なしておく。
・ 有粥無飯、有鹽無醋 不自由なこともあるということであるう。

問う、古人言有りて言く、言語道断、心行處滅す、と。請う師道え。師云く、阿弥陀佛。僧云く、什摩と為てか却つて此くの如くするや。師云く、汝子細に検点せよ。

問う、古人は「言語道断、心行處滅」と云つております。和尚さんもどうか一言おっしゃつて下さい。師が云う、阿弥陀佛。僧が云う、どうしてそんな風におっしゃるのですか。師が云う、子細に点検しなさい。

・ 僧は「言語道断心行處滅」した言句を期待していたのに、阿弥陀仏と師が言語道と心行處を示したので、却如此と云つたものと思われる。

・ 汝子細検点 そこをちゃんと解つてほしいといつことであるう。

問う、古人言有りて言く、夜夜佛を抱きて眠り、朝朝相い共に起く、と。如何なるか是れ佛。師云く、汝還た古人を信するや。学

人(云く)終に敢えて違背せし。師云く、汝若し古人を信ぜば、又手して申問するもの佛に非ずして誰ぞ。

・夜夜抱仏眼云々 傳大士頌。

問う、久しく沈淪に處る、請う師拯濟せよ。師云く、棄沈淪に在ること幾時ぞ。与摩ならば則ち沈淪を假らざり去るなり。師云く、又与摩にし去るや。

・与摩則不假沈淪 幾時沈淪に處るかが解れば沈淪せずすんでいたでしょう。

・又与摩去也 こんどは又たそんな風にして行くのか(沈淪を仮らずという風に)。

問う、言の及ぶ所に非ず、解の到る所に非ず、什摩人能く到るや。師云く、阿誰か棄をして擔枷帶索せしめしや。僧云く、今日明師の批判するに遇うを得たり。師云く、我は則ち与摩に批判す。棄は什摩の處に到りしや。対えて云く、熱ければ則ち靈原に源を取り、寒ければ則ち焼火して爐を圍む。

・靈原取原 靈原がよく解らない。或いは靈泉の誤記か。取原はそこに水の源を取ること。

問う、盡十方世界是れ解脱の門、更に疑う者有らば、如何にしてか入るを得ん。師云く、我は汝が巧悪に似ず。僧云く、和尚も也た是れ此の便を得るに慣れたり。師云く、先に撩る者は賤し。

・我不似汝巧悪 わしはお前のように悪がしい奴ではない。疑うことなく解脱の門に入る。

・慣得此便 例の手を使うのはお手のもの。

・先撩者賤 諺であらう。